

**国家統合後のユーゴスラヴィアにおける
民族間関係と議会政治
- 1923年から1924年の展開 -**

材木 和雄

広島大学総合科学部

広島大学平和科学研究センター兼任研究員

**National Question and Parliamentary Government in the
First Yugoslavia from 1923 to 1924**

Kazuo ZAIKI

Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Research Associate, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

The word of Yugoslavia originally means a South Slavic country. It was established in December 1918 by the unification of the two states. One is the Kingdom of Serbia, and another is the state of the Slovenes, Croats, and Serbs. The latter is an ad hoc state that the Habsburg' South Slavs founded after the breakup of the Austro-Hungarian Empire. However, there was a latent disagreement among the South Slavic political leaders on which way they should integrate the two states.

To put it simply, there were two models of unification. One is to make a federal state and another is to merge the South Slavs' state into Serbia. The former was the idea of the Habsburg' South Slavs, and the latter was that of Serbians'. The fatal problem was that the representatives of the Habsburg' South Slavs did not negotiate a unification treaty with Serbian government. They took for granted that the autonomy of the local government in the former Austro-Hungarian countries was guaranteed. But the Serbian leaders did not think that they made such a promise.

The ethnic dissension among the South Slavs after the unification, particularly the antagonism between the Serbs and Croats, started with the first two years of governance by an overwhelmingly Serb administration. The government had pursued a cruel suppression policy towards antigovernment movements, so that they poisoned Serbo-Croatian relations from the very outset of Yugoslavia's experiment.

However, there was an effort to reverse the ominous polarization of Serbs and Croats, endowing Yugoslavia with a viable political system. The first striking attempt was the establishment of a coalition government composed of the Davidvić's Serbian Democrats, Spaho's Bošnjak Muslims, and Korošec's Slovene Populists, supported by Radić's Croatian Republican Peasant Party.

Unfortunately this government, priding itself as a government of reconciliation was collapsed soon by antiparliamentary method, though it had a parliamentary majority. It had three points of weakness. Firstly, this government was represented by only small part of Serbs, so that it was not qualified to conclude an ethnic agreement on behalf of the Serbs. Secondly, it was disfavored by the king, because of its heavy dependence of Croatian Republican Peasant Party. Thirdly, royalist Davidvić was so vulnerable to the attack of the court and oppositions that he could not show effective resistance to them.

Nevertheless, the king and Serbian Radicals on the one hand, and Radić on the other, were moving steadily toward one another during this period. Because the former could not neglect the presence of Croatian Republican Peasant Party and the latter wanted to negotiate with the former to conclude a national agreement.

1 問題の所在

ユーゴスラヴィアとは「南スラヴ人の国」を意味する。この国は、1918年12月1日、二つの国家の合体によって誕生した。一つはセルビア王国であり、もう一つは「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」である。後者は、旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人諸地域が独立を宣言して樹立した国家であった。

長らく別々の国家と地域に分かれていた南スラヴ人の中で統一国家形成の気運が高まったのは第一次世界大戦中であり、終戦後の混乱した内外情勢を背景に二つの国家の統合は急いで実行に移された。しかし、統一国家を形成する過程で大きな争点となったのは、南スラヴ人の諸地域をどのようなかたちで一つの国にまとめるかであった。

大まかにいってそこでは二つの考え方が対立した。一つは、わかりやすくいえば、旧オーストリア＝ハンガリー領とセルビア王国の対等合併である。国家制度としては連邦制国家に近い形態になる。その場合、二つの地域は外部に対して単一の国家と共通政府の枠組みを形成するが、共通行政以外の事項に関しては二つの地域は合併以前に認められていた自立的な決定権を完全に維持する。この考えは、19世紀後半のクロアチア人政治指導者ヨシプ・シュトロスマイエルに起源をもち、第一次世界大戦中に旧オーストリア＝ハンガリー領の亡命政治家が結成したユーゴスラヴィア委員会に受け継がれた国家像であった。これは、見方を変えれば、二つの国家をハプスブルク皇帝のもとに統合したオーストリア＝ハンガリー二重帝国の枠組みをユーゴスラヴィアで再現しようとする考えであった。

もう一つは、セルビア王国による旧オーストリア＝ハンガリー領の吸収合併である。国家の形としてはセルビア国家の領土の拡大である。これは、19世紀以来セルビアが推進してきた民族解放運動のプログラムを拡大適用したものであった。この運動は、バルカン半島の各地に散在するセルビア人を一つの国家に統合すること（大セルビア国家の実現）を最終的な目標としていた。その一環として、当初セルビアは、旧オーストリア＝ハンガリー領のセルビア人居住

地域の併合をめざしていたが、第一次世界大戦中にはクロアチア人やスロヴェニア人を含めて全南スラヴ人の解放を戦争目的に掲げ、南スラヴ人統一国家運動の担い手に転換したという経緯があった。

本来ならば、二つの国家の代表は、統一国家の形成前に統合後の国家像を話し合い、具体的な方針を取り決めた上で統一国家の樹立を宣言すべきであった。実際、旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の代表はセルビア代表と協議をするために国家統合の条件をとりまとめていた。ところが、この協議は実施されず、国家の統合だけが先行して実施されることになった。その結果、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」はセルビア王国と無条件に等しい形で合併することになり、当時の両者の力関係によって、統一国家の統治機構の設立と運営はセルビア側が主導権を握る形で実行されることになった。そのため、セルビアによる旧オーストリア＝ハンガリー領の吸収合併の路線が事実上進行していくことになった。

セルビアが国家を統合する際にイデオログの役割を担ったのがクロアチア出身のセルビア人、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチであった。「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者として名を馳せたプリビーチェヴィッチは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人が歴史的に引きずってきた相違を抹消し、南スラヴ人をあらゆる意味で単一の国民（ユーゴスラヴィア人）に統合することを目標とした。そのため、個別の民族意識を温存し助長するような地方の分離主義的な動きを遮断するために、厳格な中央集権主義の原則で単一国家の建設をおこなうことを彼は強く主張したのである。

プリビーチェヴィッチのユーゴスラヴィア主義は超民族主義を主張し、個別の民族主義であるセルビア主義とは似て非なるものではあったが、その中央集権主義の国家構想は旧オーストリア＝ハンガリー領の統合をめざすセルビア王国の指導者にとって、好都合なものであった。国家統合後に内相を務めたプリビーチェヴィッチの主導によって政府は国家行政の中央集権化に着手した。彼らは、旧オーストリア＝ハンガリー領各地域の自治権を否定し、地方行政府を中央政府の出先機関のような存在に変えた。これまでの自治権の維持を期待した旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人は、まもなくそれが幻想であっ

たことを悟った。新国家の現実にはとくにクロアチア人が大きな不満を抱いた。

ベオグラード政府は中央集権的な国家制度の枠組みを瞬く間に築き上げたが、これでこの国の統治が安定に向かったとは到底いえなかった。セルビアが呑み込んだ旧オーストリア＝ハンガリー領は人口の点でも面積の点でも旧セルビア王国の二倍の大きさがあつた。そのため、1920年11月に普通選挙を実施したところ、セルビアの政権政党であつた急進党は単独では議会の過半数を制することができないという状況に遭遇した。ただこのときは中央集権主義を支持する勢力は、反中央集権主義を支持する勢力を議席の上では上回っていた。急進党は民主党と連立政権を組み、少数政党を抱き込んで、1921年6月には憲法を成立させ、立憲君主制と中央集権的な国家制度を基礎づけた。しかし、憲法制定後の1923年3月に実施された総選挙の結果でも、急進党が議会の過半数を制することができないという状況は変わらなかつた。ユーゴスラヴィアはセルビアが単独支配するには大きすぎたのである。

ベオグラードの支配層にとって強敵になつたのは、クロアチア人の支持を集めて躍進したクロアチア共和農民党である。その党首のステパン・ラディッチは、セルビアとの国家統合を決定した1918年11月の旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人政治指導者の会議で反対票を投じた唯一の人物であつた。彼はセルビアとの国家統合それ自体には反対ではなかつたが、準備不足を理由に異議を表明したのである。ラディッチは統一国家の誕生後も国家統合をクロアチア議会が承認していないことを問題にして、新国家に正当性を認めていなかった。クロアチア共和農民党は政体としては共和制を主張する立場をとり、国家制度についてはクロアチアに国家主権を認めた連邦制国家への再編を主張し、セルビア人を代表する勢力との民族間協定の締結を政治目標とした。

クロアチア共和農民党は1920年の選挙では四番目に大きな議席数を獲得しながらも議会をボイコットし、議会に参加するかどうかを政府との交渉カードとする戦術をとつた。しかし、1923年の選挙で議席を伸ばしたクロアチア共和農民党はやがて議会闘争に転じ、1924年3月には、民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の三党連合と連携して反政府連合を形成し、7月末には急進党政権の打倒に成功した。民主党のリュバ・ダヴィドヴィッチ

を首相とする新政権は、前政権の腐敗と暴力を一掃すると共に、諸民族の相互理解と寛容を謳い文句にし、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の民族間協定の締結に道筋を付けることを課題とした。これは近い将来に憲法の修正をおこなうことを意味していた。ところが、この政権は長続きせず、国王の政治介入によって、わずか二ヶ月半で倒れ、急進党政権が復活した。

ユーゴスラヴィアの主要な民族間の不和、とくにセルビア人とクロアチア人の対立は、国家統合直後の統治のあり方に端を発する。この統治はセルビア人が牛耳る行政機構によって中央集権的におこなわれ、これに対する他民族の抗議行動は厳しい措置で弾圧された。しかし、民族間の不幸な対立は単線的に進行したわけではなかった。その一方で、諸民族を代表する政党の間には民族間対立を話し合いで解決し、統治のあり方をこの国に適した形に変えようとする注目すべき動きがあった。ダヴィドヴィッチ政権を成立させた 1924 年の反政府連合の運動はその第一幕を形成するものである。

憲法に規定された議会が選挙によって初めて選ばれた 1923 年はこの国の議会政治が本格的に始動した時期にあたる。本稿は、この時期の民族間関係を議会政治の観点からみることによって、セルビア人とクロアチア人の対立が解決に話し合いによって向かう可能性がどのように生まれ、またどのように挫折したのかを明らかにすることにしたい。

2 第二回総選挙とマルコ議定書

1923 年 3 月 18 日、新国家の誕生後、二度目の総選挙が実施された。今回の選挙では、2952907 人の有権者のうち、2177051 人が投票し、投票率は 73.7% (前回 65.0%) であった。前回の選挙と比べると、有権者の関心は比較的高かったといえる。全国の選挙区では 33 の政党と政治集団が合計 381 の候補者名簿を提出したが、議席を獲得したのは 15 の政党から出された 131 の候補者名簿だけであった。政党別の得票数、得票率、議席数は次のとおりである¹。

表1 1923年3月18日の国民議会選挙結果

政党	得票数	得票率	議席
急進党	562213	25.82	108
クロアチア共和農民党	473733	21.76	70
民主党	400342	18.49	51
スロヴェニア人民党	139171	6.40	24
ユーゴスラヴィア・ムスリム組織	112228	5.16	18
ジェミイット党	71453	3.28	14
モンテネグロ連邦党	8561	0.39	2
農業者党	164602	7.60	11
社会党	23825	1.10	2
セルビア党	15236	0.70	1
クロアチア同盟	23471	0.74	2
ドイツ人党	43415	1.99	8
ルーマニア人党	7070	0.33	1
投票総数	2177051		312

選挙結果では、民族的利害の擁護を前面に出した政党²は勝利し、超民族主義の立場に立つ政党（民主党と農業者党）は敗北した。とくに民主党は41議席も減らし、第三党に後退した。主要な敗因は、党内の二大派閥であるダヴィドヴィッチ派とプリビーチェヴィッチ派との確執によって多くの選挙区で分裂選挙となり、支持票が割れてしまったことであった。

これとは対照的に、セルビア人政党の急進党とクロアチア共和農民党は、競合政党の支持票を奪って大きく議席を伸ばした。とくにクロアチア共和農民党は、地盤とするクロアチアとスラヴォニアの選挙区で68議席中52議席を獲得したほか、前回の選挙では候補者を立てなかったダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、スロヴェニアの選挙区でも18議席を獲得した。このことは、クロアチア共和農民党はクロアチアおよびスラヴォニア以外の地域に居住するクロアチア人を支持基盤に取り込み、国内の全クロアチア人の民族運動を代表する政治勢力に成長してきたことを意味していた。

与党の急進党は108議席を獲得し、議会第一党の地位に立った。これは彼らが昨年から進めてきた周到な準備や工作の成果であった³。それにもかかわらず、

政権政党として問題だったのは、議会の過半数（157）からは大きくかけ離れていたことである。彼らの議席は、政権協力が見込める小規模政党の議席を考慮に入れても132であり、過半数にはほど遠かった。これに対して、野党勢力の全議席は180であり、議会の過半数を上回った。彼らが結集すれば、議会政治の観点からは政権交代を要求することが予想された。

急進党が政権を維持できるかどうかは、クロアチア共和農民党の態度にかかっていた。1920年の憲法制定議会選挙では、クロアチア共和農民党は50議席を獲得しながらも、所属の議員を国民議会に派遣しなかった。したがって、今回もまたクロアチア共和農民党が議会への不参加を続ければ、国民議会の実質的な過半数は121となり、急進党は政権を維持することが可能であった。

しかし、選挙の直後、野党勢力の連携を求める動きが現れた。3月27日、スロヴェニア人民党の代表団とユーゴスラヴィア・ムスリム組織の指導部がクロアチアの首都ザグレブを訪問し、クロアチア共和農民党の幹部と協議を開始した。4月1日、三党の代表は、反中央集権主義の立場から政治的協力関係を持ち、ベオグラード政府に対抗していくことで合意した。新聞はこれを「連邦主義ブロック」と呼んだ⁴。

連邦主義ブロックの形成はセルビアの政界に大きな衝撃を与えた。急進党党首のニコラ・パシッチは、単独政権を維持するためにはラディッチに対して宥和政策をとらざるを得なくなった。パシッチは、4月12日、急進党議員クラブ幹事長マルコ・ジュリチッチと急進党総務会書記のヴォイスラフ・ヤニッチをザグレブに派遣した。4月13日、ラディッチらと急進党の最初の公式協議がおこなわれることになった⁵。

もっとも、この会議では問題の根本的な解決がめざされたわけではなく、連邦主義ブロックと急進党側が今後にも本格的な交渉をおこない協定を締結するための前提条件が話し合われた⁶。連邦主義ブロックと急進党代表との合意記録に最初に署名したのが参加者の中で最年長のマルコ・ジュリチッチであったため、ラディッチはこの記録文書を「マルコ議定書」と呼んだ。この記録は公にしないことが申し合わされた。これには、ラディッチらの政敵である民主党のプリビッチェヴィッチに内容を知られないようにする意図があった⁷。

連邦主義ブロックが要求し、急進党が同意した事項は次のようなものであった。(1)国家政策の遂行のために強権を発動することをやめ、法律を遵守し、憲法が保障する人権を尊重する、(2)公正な行政の実現のため、クロアチア、スロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ヴォイヴォディナの地方行政機構の幹部を更迭し、クロアチア共和農民党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織との協定によって新しい幹部を任命する、(3)国土を33の行政州に分割する法律の施行を中止し、クロアチア、スロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの領域的一体性を維持する。他方、急進党側が要求し、連邦主義ブロック側が同意した事項は、急進党の提案による国民議会の指導部の選出、急進党単独政権の形成、およびすべての国民議会議員の認証を、連邦主義ブロックを構成する三党がそれぞれの行動によって手助けすることであった⁸。これはクロアチア共和農民党にとっては国民議会への不参加の継続を意味した。

マルコ議定書の調印後しばらくの間は、双方の当事者は約束を守った。5月4日、急進党は、クロアチア共和農民党の議会への不参加によって相対的な多数派勢力になり、パシッチを首相とする単独政権を発足させることができた⁹。5月25日には国民議会の議長選挙がおこなわれ、急進党はリュバ・ヨヴァノヴィッチを当選させることができた¹⁰。急進党とクロアチア共和農民党の雪解けムードは6月初めまで続いた。

しかし、この時期にクロアチア共和農民党との正式な協定の締結を、パシッチら急進党幹部がどの程度本気で考えていたかは疑問であった。急進党の幹部は、クロアチア共和農民党が国家制度と政体に関して急進党と相容れない綱領をもっており、クロアチア共和農民党を満足させるような協定を締結できないことを事前に知っていた。したがって、パシッチにとってラディッチとの話し合いはあくまで時間稼ぎであり、「和議を申し出て戦争の準備をする」という戦術の採用にほかならなかった¹¹。一例を挙げれば、連邦主義ブロックとの協議を終えてベオグラードに戻った急進党代表は、合意文書を党首のパシッチに提出した。ところが、急進党幹部のラーザ・マルコヴィッチが後年に語ったところによれば、党の総務会は、この提案を拒否したが、彼らはこの決定を外部には明らかにしなかった。急進党はクロアチア共和農民党が国民議会の欠席戦術を

続けるという条項だけを利用し、その他の項目は黙殺するつもりでいた¹²。

政権の地歩を固めると、急進党はラディッチや連邦主義ブロックに対して下手に出る必要性はなくなった。6月7日、パシッチは反撃に出た。彼は、施政方針演説の中で、ヴィードヴダン憲法を擁護する方針を確認し、連邦主義ブロックに断固たる対決姿勢を示した¹³。このあと彼は、憲法の規定に沿って3年以内に地方政府を廃止し、国土を33の州に分割することを明らかにした¹⁴。これはマルコ議定書に反するものであった。さらに政府は、6月24日に予定されていたクロアチア共和農民党の党員総会を禁止する命令を出した。これはラディッチに対する宣戦布告であった¹⁵。急進党幹部はマルコ議定書に対する留保声明を出した¹⁶。政局は急転換した。

7月7日、クロアチア共和農民党指導部は、6月7日のパシッチ演説を「政治的な自殺行為」と断じた。彼らは、急進党側の不当性を証明するために、マルコ議定書の内容を公表することを決定した¹⁷。7月14日、ラディッチは、対話の打ち切りを党員集会で報告した。彼は、急進党政府を痛烈に批判し、宮廷の浪費を皮肉って国王夫人のマリアを第二のポンパドール伯爵夫人と呼んだ¹⁸。宮廷はこの発言に激怒し、急進党議員クラブもラディッチに断固とした態度をとることを提案した。これを受けて、7月25日、国民議会の懲罰委員会は国民議会に対して、ラディッチを不敬罪により告訴することを求めた¹⁹。

ベオグラードの動向はただちにラディッチに伝わった。これまで二度も投獄を経験していたラディッチは身柄を拘束される前に国外に出ることを決め、密かに出国し、8月18日にロンドンに赴いた。そこでラディッチは労働党のゲストになり、しばらくの間、クロアチアの民族運動に対して西欧諸国の理解と支持を得るためにロビー活動をおこなうことにした。

4 野党ブロックの形成と民主党の最終的分裂

少数与党の急進党にとって、連邦主義ブロックとの協力関係の破棄は政権運営を困難にする可能性があったが、実際には彼らはいした痛手を感じていなかった。野党勢力が複雑な分裂状況にあったからである。国民議会の中での野

党第一党は民主党であったが、他の野党から反感をもたれ、孤立していた。しかも、民主党の内部では、急進党から政権を奪うためにクロアチア共和農民党との連携関係を求めていたリュバ・ダヴィドヴィッチのグループと、急進党との連立政権の復活を求めるスヴェトザール・プリビッチェヴィッチのグループとの対立が続き、有効な対抗策が打ち出せない状況にあった。

党首のダヴィドヴィッチは、政権奪回の道を野党の大同団結に求めた。議会の過半数を有しない急進党が政権を維持する不自然な状況は、野党勢力の結束と共闘によってのみ変更が可能であったからである。ところが、プリビッチェヴィッチ派が強い影響力をもつ民主党を、野党勢力は不信の眼で見ている。彼らは、民主党の呼びかけを、連立政権の復活を急進党に促すための戦術にすぎないのではないかと疑った²⁰。そのため、ダヴィドヴィッチらは大胆な路線の転換を打ち出し、急進党との対抗路線を鮮明に印象づけることを迫られた。

彼らが提起した新方針は「地方自治の広範な拡大」であった。この構想は次の内容を含んでいた。第一に地方制度の単位となる州に対して、国家の統一性に抵触しない範囲で可能な限り大きな自治権限を与える。具体的には、どうしても国が担当する必要がある仕事（外交、国防、警察、司法、予算、交通、郵便・電信・電話）については国の所管のもとに残すが、その他のすべての仕事（たとえば、商工政策、社会政策、農業政策、治水・水道、教育、公衆衛生、道路建設、森林・鉱山管理）は中央省庁から州に権限を移譲する。第二に法律に定めにしたがって国家は州の自治機構に対して監査権限をもつが、州の自治機構はその権限の範囲内では国家機関の干渉なしに完全に自治権を行使する。第三に地方自治には財政の自立性が不可欠であり、一定の財源を国から州に完全に移譲する。第四に国家が担当する仕事についても、可能な限り州の自治機構に権限の分権化をおこなう²¹。

一方、ロンドンに滞在していたラディッチは、イギリス政府や政界の有力者に接触し、クロアチア人の民族運動に支援を求めた。しかし、イギリス政府はユーゴスラヴィアの国内問題に干渉する気はまったくなく、ラディッチは何らの支持も取り付けることができなかった。議会を中心とした政治闘争を重視するイギリス人にとって、クロアチア共和農民党がとっていた議会の欠席戦術は

何とも不可解に映った。ラディッチと面会したイギリスの要人の多くは、ベオグラードの議会に参加し、セルビア人と交渉することを彼に勧めた²²。結局、ラディッチはロンドンを去った²³。12月24日、彼は、隣国オーストリアのウィーンに戻った。ザグレブに近いこの地でラディッチは、国内の党指導部と連絡を密にして議会闘争を指導することに活動の重点を移すことになった。

クロアチア共和農民党の指導部は、国家制度に関する民主党の改革案は不十分であり、彼らがめざす民族間協定のたたき台に据えることはできないと考えた。しかし、民主党の提案は、急進党政権打倒をめざして共同行動をとるための出発点にはなりうると彼らは判断した。この点ではスロヴェニア人民党の指導部も同じ考えであった。ウィーンを訪れた党幹部から報告を聞いたラディッチは、急進党政権の打倒によって政権交代を実現し、そのあとで総選挙を実施して党勢をさらに拡大させ、有利な立場でセルビア人代表との民族間協定を結ぶというシナリオを描いた。

1924年1月26日、ザグレブで連邦主義ブロックの代表者会議が開催された。彼らは、急進党政権を打倒するために民主党と協力関係を結ぶこと、また政権打倒のためにクロアチア共和農民党の議員を国民議会に参加させることを決定した。2月8日、クロアチア共和農民党の代表（ヴラツコ・マチェックとユーライ・クルニェヴィツ）がベオグラードに行き、民主党の代表と話し合いをおこなった²⁴。2月15日、パシッチ政府は、これまで先延ばしにしてきたユーゴスラヴィアの国土を33の州に分割する行政区法を完全実施に移した。地方政府は機能を停止し、クロアチアはおよびスラヴォニアは4つの州に、スロヴェニアは2つの州に分割された。

政府の動きに対抗するため、連邦主義ブロック代表と民主党代表は合意形成を急いだ。彼らの協定によれば、野党共闘の目的は、急進党政府に代わる新しい政府を樹立し、国家の危機を打開することであった。この政府は、国王の承認を得て国民議会を解散し、自由選挙を実施することを予定していた²⁵。国家制度の改革に関しては、憲法修正を明確には打ち出さなかったが、政権獲得後に国家制度の問題について協議をおこなうことを申し合わせた。

3月6日と7日、民主党の総務会と議員クラブは、野党間協定を議題に合同

会議を開いた。会議では、予想されたとおり、クロアチア共和農民党を仇敵とみなすプリビーチェヴィッチはラディッチをやり玉に挙げて、このような協定を結んでも民主党とクロアチア共和農民党との争いは治まらなると述べ、協定の締結に強く反対した²⁶。しかし、彼の意見に賛同する者は少数にとどまり、民主党議員の多数は指導部の原案を了承した²⁷。ダヴィドヴィッチはただちに党を代表して協定に署名し、これによって、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織、民主党の野党ブロックが成立した。クロアチア共和農民党は野党ブロックに直接的には加わらなかったが、国民議会に所属議員を参加させて彼らの倒閣運動を支援することを約束していた²⁸。

野党ブロックの発足を受けて、クロアチア共和農民党は行動を開始した。3月8日、ベオグラードに到着した副議長のヨシプ・プレダヴェッツは、20人の議員資格の認定を国民議会議長のリュバ・ヨヴァノヴィッチに提出した。3月13日、国民議会内の資格審査委員会はこれを認証した。3月18日、プレダヴェッツは新たに31人の議員資格の認定を申請した。ベオグラード滞在中、彼は、マチックとともに野党ブロックの代表と協議をおこない、このあとラディッチに経過を報告し、新たな指示を求めるためにウィーンに旅立った。クロアチア共和農民党は3月29日までに10人の議員資格の認定を追加申請し、合計61人の議員を国民議会に参加させることをめざした。

急進党政権は窮地に立った。クロアチア共和農民党の議員が議員資格を得て国民議会の審議に参加すると、与野党の勢力は逆転し、野党は国民議会で多数を占める勢力となる。これを避けるために、急進党指導部は、クロアチア共和農民党の議員資格の認証を遅らす作戦に出た。すなわち、国民議会内の資格審査委員会は、予算審議の優先を口実に、会議の開催を3月27日まで延期したのである。ついで首相のパシッチは、先手を打って政権維持のイニシアチブを握ろうとした。3月24日、彼は宮廷に出向き、国王に辞表を提出した。国王は野党との連立を条件に再びパシッチを首相に指名し、彼は組閣の権限を得た。

パシッチは直接ダヴィドヴィッチを呼び、民主党の政権参加を要請した。これに対して、ダヴィドヴィッチは即答を避け、議員クラブの了承が必要であると回答した。3月25日開催の民主党の総務会と議員クラブの合同会議でダヴ

イドヴィッチはパシッチとの会談を報告した。ダヴィドヴィッチはもとよりパシッチの要請に応じる気はなかった。国王が求めた連立政権が成立しなければパシッチは組閣権を返上しなければならず、そうなれば野党ブロックの指導者であるダヴィドヴィッチが首相に指名される可能性があった。会議に参加した民主党議員の大半はダヴィドヴィッチの考えを支持したが、プリビーチェヴィッチ派の議員が欠席していたため、決定は先送りになった²⁹。

このときプリビーチェヴィッチ派の議員は彼の宿舎に集まり、連邦主義ブロックと民主党が連立政権を構成するようなことになった場合には党指導部の責任を問い、自分たちは野党の立場をとることを申し合わせた。彼らはこの見解を党首のダヴィドヴィッチに文書で伝えた。しかし、同日夜、プリビーチェヴィッチはパシッチに公式に呼ばれた。会談後プリビーチェヴィッチは記者に「国家創造政党」同士の協力関係が成立したことを明らかにした。これは急進党と彼のグループが連立政権を形成することを意味していた。翌3月25日、プリビーチェヴィッチと14人の議員が民主党を離脱することを伝える文書を党首のダヴィドヴィッチは受け取った。プリビーチェヴィッチは民主党の綱領を実践するために独立民主クラブを結成することを通告していた³⁰。

3月27日、パシッチは、プリビーチェヴィッチ・グループとの連立政権を発足させた³¹。この内閣は、パシッチとプリビーチェヴィッチの名字の頭文字をとってP-P政権と呼ばれた³²。独立民主クラブは4つの閣僚ポストを獲得し、プリビーチェヴィッチは教育相に復帰した³³。パシッチとプリビーチェヴィッチは、国民統合の実現のために憲法の遵守と実行を基本に据えることを協定し、野党ブロックに対抗して「国民ブロック」の結成を宣言した。プリビーチェヴィッチはまもなく独立民主党の結成を宣言した。大セルビア主義の立場からセルビア国家の拡大をめざす急進党と、ユーゴスラヴィア主義の立場から南スラヴ人の統合国家をめざす独立民主党は理想とする国民国家像に大きな相違があったが、両者は中央集権主義的な国家制度を維持する点で立場を共有し、反中央集権主義勢力に対抗するために手を結んだのであった。

しかし、民主党を離党した議員は15人とどまったため、国民ブロックは依然として議会内では少数派勢力であった。加えて、政府の少数民族政策への

不満から、これまで政権に協力してきたジェミット党とドイツ人党が野党ブロックの支持に転換したため、P-P 政権の議会運営は一段と困難さを増した。

パシッチとプリビーチェヴィッチは、予算が成立したあとも議員資格の審査委員会を開かないように工作した³⁴。政権を維持するためには、クロアチア共和農民党の議員資格を認証しないこと以外に方法がなかったからである。3月31日、国民議会は野党議員が欠席する中でいくつかの条約の批准を承認し、再開時期不明のまま閉会となった。4月10日、クロアチア共和農民党63名、民主党33名、ユーゴスラヴィア・クラブ24名、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織18名、農業者党11名、ドイツ人党8名、合計157人の野党議員が集結し、合同会議を開いた。彼らは、国民が選んだ議員の資格認証を妨害は前代未聞の暴挙であり、また正当な理由なく党利党略で国会の開催を延期するのは現在の政府の反議会主義的な性格を示しているとの決議を採択した。この決議は国王のもとにも送られた。それにもかかわらず、政府は5月5日まで議会審議の再開を延期すると発表したため、4月12日、野党は再び合同会議を開き、政府の決定を糾弾する声明を発表した。

同じ日に首相のパシッチは突然辞表を提出した。しかしこれは、野党の批判をかわすために仕切り直しをおこなう戦術であった。パシッチは政権を手放す気はなかった。彼は再び首相に就任し、国民議会の解散と総選挙を告示する許可を国王から得る考えであった。国民議会の解散すれば、クロアチア共和農民党議員の資格認証は不要になり、選挙管理内閣として政権を維持することが可能であったからである。国民議会議長のヨヴァノヴィッチは、パシッチを首相候補者として国王に推薦した。ここまではパシッチの計算通りであった。ところが、国王は、野党と世論の反発に配慮して議会の解散を了承せず、パシッチの首相指名を見送った。このあと後継首相の決定は与野党間の対立に国王の意向が絡んで難航し、40日間の政治的空白が発生することになった。

4 国王による調停工作とその結果

国王アレクサンダルは、与野党の政治指導者を頻りに宮廷に呼び、その対立

の調停者として振る舞いつつ、自己の意向を実現しようとした。彼の最大の関心は君主制の維持であった。そのため、彼は、共和制を主張するクロアチア共和農民党には大きな反感をもち、これと連携するダヴィドヴィッチら野党指導者の行動を快く思っていなかった。彼は表向き野党勢力の主張を理解する態度を装っていたが、実はパシッチと急進党の政策を支持していた³⁵。しかし、数年後に独裁制を宣言したアレクサンダルのもう一つの関心は、国王の政治的優位を築き上げることであった。そのため、国王に対抗する傑出した力をもつ政治家が存在することを、彼は好まなかった。とりわけアレクサンダルは、セルビアの指導者として絶大な威光と権力を保持してきたパシッチに対して大きなライバル心を抱き、願わくはこれを失脚させたいと考えていた。彼が、国民議会議長が推薦したパシッチを、慣例に反して首相に指名しなかったのは、パシッチの影響力を弱めるチャンスとみたからであった³⁶。

5月10日、野党ブロックの指導者は議会主義的方法による政治危機の解決を求める立場を確認した。同日、国王は急進党幹部のマルコ・トリフコヴィッチを首班指名し、野党ブロック（民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織）を取り込んだ大連立政権の樹立を託した。国王はこれによって野党ブロックの要求に応えたことを印象付けようとしたが、三党の政権参加についてはトリフコヴィッチに次の条件を指示した。(1) 野党ブロック三党がクロアチア共和農民党との連携を絶つこと、(2) 憲法の諸規定の実行、とくに国土を33の州に分割する法律の施行に協力すること、(3) 反国家的な集団および国家の転覆を策謀する集団を粉砕することあり、これはクロアチア共和農民党に対する取り締まりの強化を暗に含んでいた³⁷。

野党ブロック三党はこのような条件を受け入れる意思はなかった。逆にダヴィドヴィッチは連立政権に参加する条件をトリフコヴィッチに突きつけた。彼らは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の代表が民族間協定を締結することがユーゴスラヴィアの国家統合を強固にする唯一の基礎であるという考えに立って、この協定の締結に反対する個人および集団を政権から排除することを第一に要求した。これは、急進党と独立民主党を政権から排除することを意味していた。さらに彼らは、汚職政治家の摘発、党派性を抜きにした行政

幹部の交代、憲法によって保障された市民的・政治的権利の擁護を基本原則とすることを求めた³⁸。しかし、野党ブロックが提示した条件は急進党と独立民主党にとっては受け入れがたいものであり、彼らはこれを門前払いにした。組閣調整が不調に終わったため、トリフコヴィッチは首班指名を国王に返上した。

国王は予定していたフランス訪問を延期して後任の人選にあたった。国王は民主党のダヴィドヴィッチを首班指名し、大連立政権の形成を命じた。ただし国王は、ダヴィドヴィッチらがクロアチア共和農民党と手を切るか、またはクロアチア共和農民党が綱領を改めて現行の国家制度を認めるかを暗に求めた³⁹。ダヴィドヴィッチは首班指名を受諾し正式に組閣作業を開始した。しかし、急進党と独立民主党は、基本原則に相違がある者とは一緒に仕事ができないと主張して、連立政権に加わることを断った。このため、5月18日、ダヴィドヴィッチもまた首班指名を返上するしかなかった。国王は代案として軍人政府の樹立を示唆した。しかし、これは政党政治の否定を意味し、与野党共にこのような内閣の形成に強く反対した。彼らはいずれも、議会外の人物に政権を任すくらいなら、対立する陣営が組閣する方がましだと主張した⁴⁰。

結局、国王は、次善の策としてパシッチらと妥協する道を選んだ。5月21日、彼はパシッチを首相に指名し、P-P政権を復活させたのである⁴¹。ただし野党ブロックの反発に配慮して国王は、クロアチア共和農民党議員の資格認証をおこなうこと、ならびに当面は総選挙の実施を求めないことを指示した。パシッチは、政権を獲得するために国王の要求を受け入れた。その代わりに彼らは事実上、国王から大きな保証を得ていた。議会の過半数の議席を確保していない彼らに政権を委ねるということは、多数派勢力を無視した政権運営に国王が同意したことを意味していたからである。

5月26日、国民議会は再開された。抗議のため野党はこの日の会議を欠席した。国王の意向により、国民議会議長のヨヴァノヴィッチは、クロアチア共和農民党議員の資格認証をおこなうために、審査委員会の開催を求めた。5月27日、クロアチア共和農民党議員の資格認証が議場で報告された。クロアチア共和農民党議員が宣誓を終えたあと、民主党のダヴィドヴィッチは内閣不信任案を提出する構えでいた。クロアチア共和農民党の全議員が投票権を得た

め、多数派の野党が提出する内閣不信任案は成立不可避であり、P-P政権の生命は風前の灯火かともみえた。しかし、パシッチは奥の手を用意していた。ダヴィドヴィッチらが動議を提出する前に彼は発言を求め、10月20日まで国民議会を閉会とする勅令を読み上げた。このあと会議は散会となった。このため、野党は内閣不信任案を提出できなくなったのである⁴²。

政治危機が反議会主義的な方法で強引に幕引きが図られたことに対して、野党勢力は態度を硬化させた。君主制を支持する政党の中からも国王の調停工作には疑問の声が上がった。

国民議会が閉会となった直後の5月29日、野党ブロック三党の党首は連名で国民に向けて弾劾公告を発表した。彼らはまず、戦傷者補償法、洪水による被災地の支援、農業者金融法など国民生活に関わる重要法案の採択が残っているのに国民議会を閉鎖した政府の無責任さを糾弾した。続いて彼らは、待ち望まれていたクロアチアの議員がようやくベオグラードに来たのに議会の閉鎖によって発言権を封じられたのは民族間の協力関係の実現を阻害する暴挙であると非難し、議会の閉鎖によって選挙によって国民の負託を受けた国会議員に政府が議会での質問と審議を認めないのは明らかに憲法違反であること批判した。彼らは、このたびの政府の行為を「クーデター」とみなし、議会の閉鎖を政府に許可した国王の行為を問題視した。彼らはこう主張した。国王には議会の閉会を命じる権限があるが、憲法にはこの国は憲法と議会制に依拠する君主制国家だと明記されている。そうだとすれば、国民議会の解散は、議会の信任を得た政府の提案にもとづいておこなわなければならない。議会の同意なしに、国民の意思に反して議会を閉鎖することは憲法の秩序を犯すものであり、国民主権の原則からもかけ離れたものである。こう述べて、彼らはただちに議会を再開することを要求した⁴³。

一方でウィーンのラディッチは、外交行動でベオグラードに抗議の意思を示そうとしていた。彼は、農民インターナショナルからの招聘を受け入れ、ソヴィエト連邦を訪問することを決めたのである。これは、クロアチア問題の解決に外国のファクターの支援を求める戦術に戻ったことを意味していた。ラディッチはソヴィエト外相のチチェリンからの招聘状も獲得して出発し、6月7日、

モスクワに到着した。歓迎を受けたラディッチは、党綱領と戦術、とくに平和主義の闘争戦術を変えないことを条件に、農民インターナショナルにクロアチア共和農民党の加盟を申請した。この加盟は7月1日に認められた⁴⁴。

国内の動きに戻ると、政府批判を強める野党勢力に対して、パシッチは強権政策を続けるしか対抗策がなかった。すでに5月27日の政治集会で、パシッチは集まった支持者に対して、急進党は国益を守るためにはあらゆる手段をとり、血を流すことも恐れないと宣言していた。その主要な手段は官憲による反政府勢力の運動の弾圧であった。内務省は、国家と国家秩序の基礎を批判するような反対勢力の集会を力づくで阻止するように地方機関に命令を出した。野党支持者と政府支持者の衝突はしばしば流血の事件となった。

しかし、強権による政権の維持には限界があった。国民生活に関わる重要な法案を先送りにして議会を閉鎖した政府の行動に世論は反発し、不満を力づくで封じ込むのは無理があった。窮地に立ったパシッチは、7月17日、辞表を提出した。彼は首相を続ける条件として、国民議会の解散と総選挙の実施の許可を国王に求めた。しかし、国王は国民議会の解散を認める気はなかった。パシッチらの要求を認めれば、またもや反議会主義的な手口を支持したと批判が高まるのは必至であった。また反政府勢力が民衆を動員する構えを示し、それが既存の政治秩序と立憲君主制の政体を脅かしかねない状況の下で選挙を実行することは得策ではなかったからである。

国王は、国民議会の再開を前提に解決策を模索し、議長のヨヴァノヴィッチを首相候補者とする意向を示した。しかし、これにはパシッチとその側近が断固反対した。結局、国王は不本意ながら野党ブロックに政権を委ねざるを得なくなり、民主党のダヴィドヴィッチを首相に指名した。

5 クロアチア共和農民党の入閣問題

1924年7月27日、ダヴィドヴィッチは、民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織を与党として組閣し、議会の多数派を代表する政府が発足させた。与党三党以外に、クロアチア共和農民党、農業者党、ジェミ

イト党、ドイツ人党も政府を支持した。

ダヴィドヴィッチの施政方針によれば、政府の主要課題は、国家制度の改革について合意形成をおこなうための環境を整備することにあった。ダヴィドヴィッチらは、ただちに国家制度の問題について話し合いに入るのではなく、その前に諸民族の間に相互理解を広め、寛容な精神で相手に接する雰囲気を作り出すことがまず必要だと考えたのである。これは妥当な判断であった。1918年の国家統合以来進められてきたセルビアとセルビア人中心の国造りによって、セルビア人と非セルビア人との対立が深まっていたからである。

この政権の存続はクロアチア共和農民党の支持に依存していた。もし彼らが不支持に回れば、急進党と独立民主党の方が相対的に多数派を形成し、政権運営が困難になる可能性があった。ダヴィドヴィッチはこのことをよく理解していた。彼は、クロアチア共和農民党から安定した協力を確保するためにはこれを政権に参加させることが必要だと考え、彼らのために4つの閣僚ポストを用意していた。彼はクロアチア共和農民党の入閣に對外的な意義を認めていた。彼らの代表が入閣すれば、内閣はセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の主要三民族の代表で構成されることになり、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の政府にふさわしい陣容になるからであった。

しかし、宮廷と野党（急進党と独立民主党）はクロアチア共和農民党代表の閣僚起用には大反対であった。その理由の一つは、クロアチア共和農民党の党綱領が共和制の政体と連邦主義的な国家制度を求めていたことである。これは、君主制の政体と単一国家を前提とするこの国の憲法に反する要求であり、国王サイドがもっとも強い反感をもっていた点である。もう一つは、党首のラディッチがモスクワを訪問し、クロアチア共和農民党をコミンテルンの影響の強い農民インターナショナルに加盟させたことである。これに対して、民主党指導部は、クロアチア共和農民党の入閣に障害があるとは考えていなかった。彼らは、むしろ問題は楽観的に解決できると構えていた。クロアチア共和農民党を内閣に参加させることによって、従来の政治的立場を変えさせ、君主制と憲法を承認させることができるとみていたのである。

クロアチア共和農民党代表の入閣をめぐる交渉は9月の初めに始まった。9

月13日、クロアチア共和農民党の議員総会は、同党代表の入閣を認める決定をした。翌日、数万人の民衆を集めて開催された党集会で、ラディッチは同党の決定を民衆に報告した。この日の演説で注目されるのは、ラディッチが連邦制的な国家制度を求める姿勢を堅持しながらも、君主制を容認する構えを示したことである。9月15日、クロアチア共和農民党指導部は閣僚候補者の人選をし、要求ポストを決定した。政権参加によって政府の基盤を固め、行政官僚の腐敗を一掃し、自由選挙の実施に必要なあらゆる措置を講じる。しかるのちに総選挙を実施し、勢力を拡大して優位な立場でセルビア人代表との話し合いに臨む。これが、彼らが描いていたシナリオであった⁴⁵。

クロアチア共和農民党代表の入閣調整は最終局面に入った。9月21日、ダヴィドヴィッチは保養中の国王を訪ね、内閣改造の計画を伝えた。「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の国王である以上、クロアチア人の代表が政府に加わることに国王は反対できないはずだとダヴィドヴィッチは考えていた。ところが、国王はクロアチア共和農民党代表の閣僚起用を了承しなかった。共和制と連邦制国家の要求をラディッチが放棄する意思があるようには思えないというのが理由であった。これに対して、ダヴィドヴィッチは持論を述べ、クロアチア共和農民党を政権に参加させることによってラディッチの態度を変えさせることが容易になると国王を説得した。だが、国王はそのような見通しに賛成できないと述べた。結局、ダヴィドヴィッチは、ザグレブに内相のナスタス・ペトロヴィッチを派遣してラディッチと会談させ、ラディッチから国王が満足するような回答を引き出すと約束してこの日の会談は終わった。

国王は、クロアチア共和農民党代表の入閣を承認する条件として、彼らが共和制と連邦制国家の要求を明確に取り下げることが求めた。これはクロアチア共和農民党が党綱領の一部を修正することを意味していた。ダヴィドヴィッチは国王の要求を満足させることを安請け合いしたが、これはやや無理な話であった。クロアチア共和農民党は、次の総選挙の結果を見ない限り、国家制度についていかなる話し合いにも応じることができないという従来の立場を変える気はなかったからである。その理由の一つは、彼らが次の選挙で議席を拡大してもっと有利な立場に立つことをねらっていたからであったが、もう一つの事

情は、現状では交渉相手が不在であったことである。

クロアチア共和農民党がめざしていた国家制度に関する協定は、各民族を代表する政党の間で締結されるべきものであった。そうでなければ協定は正当性をもたないからである。その際、クロアチア人に関してはクロアチア共和農民党が代表政党であり、スロヴェニア人についてはスロヴェニア人民党が代表政党であることは明らかであった。しかし、セルビア人についてはこれを代表する交渉主体がなかった。クロアチア共和農民党との連携を求めるダヴィドヴィッチの民主党はセルビア人政党の一つであったが、30議席程度の勢力であり、セルビア人の多数を代表する勢力とはいえなかった。セルビア人の多数を代表する政党はやはり急進党であったが、彼らはこのときクロアチア共和農民党との交渉を拒否していた。したがって、国家制度に関する民族間交渉と協定の締結をおこなうためには、総選挙を実施し、クロアチア人やスロヴェニア人との交渉を求めるセルビア人政党が多数の議席を獲得し、交渉主体として出現することが必要だとクロアチア共和農民党幹部は考えていたのである⁴⁶。

ダヴィドヴィッチを含めて政権指導部は、クロアチア共和農民党の従来主張から考えて、ラディッチらがいまの時点で最終的な協定の中身について明確な態度を示すようなことは期待できないことをよく理解していた。それでも彼らは、この場を乗り切るために、国王や野党の疑念を払拭するような声明をラディッチらが出してくれることを願っていた⁴⁷。

9月23日、ダヴィドヴィッチ首相の指示によって、内相のペトロヴィッチはザグレブに行き、ラディッチと会談した。ペトロヴィッチは、クロアチア共和農民党代表の入閣に関する障害を伝え、国王の要求を満足させる態度を示してほしいとラディッチに要請した。ラディッチは、これに応じて次の内容の声明を発表した。(1)現行の国家の統一性と、この国家の内部でセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人は共通の利益を有することを承認する。(2)国家の政体としては、国王の影響力が議会の権利によって制限される「イギリス型」の君主制を承認する用意がある。(3)反動的で反議会主義的な前政権を批判する。この政権には国王の影響力が必要以上に大きかったと考える。(4)議会主義に逆らって暗躍する勢力を排除し、議会制民主主義の厳格な遵守を志す現政権を支

持する。(5)クロアチア共和農民党は真摯な話し合いと合意の形成によって問題を解決する立場に立ち、国家制度の変更は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の多数を代表する者が完全に自由な意思によって合意に達したときに初めて可能になるという考えを改めて主張する。ただし、この話し合いは総選挙のあとにおこなわれる⁴⁸。

ペトロヴィッチがラディッチとの会談によって引き出した声明にダヴィドヴィッチ政府は非常に満足していた。民主党の機関誌は、君主制と国家の統一性を正式に認めたラディッチの発言を「進化」として歓迎した。ラディッチの声明から彼らはこう考えた。ラディッチの共和主義は旧政権の強権と覇権主義に向けられた抗議のシンボルにすぎなかった。クロアチア共和農民党は新政権のもとでは違った態度をとっている。今回のラディッチの声明は、今後の最終協定をめぐる交渉でも、彼らがクロアチア人の民族自決権の要求を放棄した立場で望むことを示す兆候と考えられる。民主党の指導部はこのように楽観的な見通しを引き出した。しばらくあとの発言であるが、ダヴィドヴィッチは、この声明によってラディッチは単に国家の統一性と君主制、およびセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の民族的一体性を認めただけでなく、連邦制を絶対的な要求とすることをやめたのだと述べた⁴⁹。

しかしながら、クロアチア共和農民党の声明には国家制度の問題にどのような態度をとるのか明確な言及がなかった。彼らはこの問題は総選挙のあとに初めて話し合いの対象になると述べていた。したがって、この声明からクロアチア共和農民党が連邦主義の立場を放棄したと結論づけることは無理があった。

したがって、ペトロヴィッチとの会談後にラディッチが出した声明は国王の要求を満足させるものではなかった。それどころか、国王は、イギリス型の君主制ならば認めるというラディッチの発言に感情を害していた。それは「君臨するが統治はしない」存在になることを国王に求めているように聞こえたからである。国王はダヴィドヴィッチ政権の楽観論はあてにならないと考え、再びパシッチと妥協する方向に進んだ。もともと野党ブロックに政権を委ねたくなかった国王はダヴィドヴィッチ内閣に非協力的であり、野党による政府攻撃を間接的に助けていた⁵⁰。しかし、いまや国王は、クロアチア共和農民党の政権参

加を拒否するために、急進党の積極的な協力を求めようとしたのである。

他方、急進党にとっても、クロアチア共和農民党の政権参加をどうしても認めたくない事情があった。クロアチア共和農民党代表の入閣によってダヴィドヴィッチ内閣が政権基盤を固めれば、政権から排除される期間が長くなる可能性があったからである。しかも、ダヴィドヴィッチ内閣は旧急進党政権の汚職を追及する法律を準備していた。これが成立すれば、党幹部の多くが職権乱用により刑事責任を追及される恐れがあった。瀬戸際に立たされた急進党は、一刻も早くダヴィドヴィッチ内閣を打倒しなければならなかった。

急進党指導部は、宮廷サイドを味方につけようとした。9月27日、パシッチはメッセージを作成し、密かに使者を国王のもとに送った。パシッチの書簡は、国家を存亡の危機から救うためとして、ラディッチらと連携しようとするダヴィドヴィッチ首相を辞任させ、挙国一致の連立内閣を暫定的に形成することを提案していた。興味深いことは、その際にパシッチ自身はこの内閣に加わらないがその実現には協力を惜しまないと明言したことである⁵¹。国王は、パシッチの提案が自分の考えと完全に一致していることに喜んだ。国王は、使者を介してパシッチに積極的に助言を求めた⁵²。ここにパシッチと国王との連携が成立し、両者は政権打倒に向けて共同行動を取り始めたのである⁵³。

6 国王と野党による倒閣運動

クロアチア共和農民党は、首相のダヴィドヴィッチとは異なって、同党代表の入閣をどうしても実現しなければならない問題とは考えていなかった。彼らにとって重要な問題は、ベオグラード政府への参加ではなく、ザグレブの議会と行政府で独自の決定をおこなう国家的権利の回復であった。彼らは、クロアチア共和農民党との関係強化によって政権基盤を安定させたいと考えるダヴィドヴィッチから強い要請を受け、入閣問題に前向きに取り組んでいただけであった。したがって、たとえ入閣が実現しなかったとしても、政府に対する協力的態度を変えるつもりはなかった。むしろクロアチア共和農民党は、野党の急進党と独立民主党の策謀を警戒していた。入閣問題の解決を遅らせて、クロア

チア共和農民党の指導部に問題発言をさせ、これをきかっけに政権を打倒したいと彼らが動いていることは容易に推察がついたからである。

このような考えから、9月29日、クロアチア共和農民党の幹部会はダヴィドヴィッチと国王との会談の結果を待たずに声明を発表した。その要点はこうであった。クロアチア代表の閣僚就任に障害があるならば、政府はこれを断念してもかまわない。クロアチア共和農民党は引き続き議会に参加し、閣外協力で政府を支持する。もしそうすることによって国王の信任がもっと厚くなるとダヴィドヴィッチ首相が判断するのであれば、今後はクロアチア代表の閣僚起用を口にしなくともよい。クロアチア共和農民党はマチェックとプレダヴェッツをベオグラードに派遣してこのことをダヴィドヴィッチに直接伝えた。これに対して、ダヴィドヴィッチはクロアチア代表の閣僚起用には障害はなく、問題は数日後に解決すると述べた。ダヴィドヴィッチは国王の了承をなかなか得られないことに触れずにこのように述べたが、これは空約束にすぎなかった⁵⁴。

10月初め、国王とパシッチは使者を介して頻繁に接触するようになった。このことは狭い政界ではすぐに公然の秘密となった。しかし、野党にとって政権の打倒はまだ容易ではなかった。ダヴィドヴィッチ政権は議会の多数派と世論の支持を兼ね備えていたからである。議会主義の観点からは、ダヴィドヴィッチ内閣の政権基盤は盤石であった。したがって、総選挙の結果を待たずにこの政権を野党が倒すとすれば、政府の政策の誤りや失態を露わにさせて世論の信頼を失墜させるとともに、非議会主義的な手段と圧力で首相に辞任を迫る以外に選択肢はなかった。

この点で野党の倒閣運動にとって重要な協力者となったのは軍部である。クロアチアを管轄する第4軍管区の司令官は、捏造された資料を基にクロアチア共和農民党が反国家的でポリシェヴィキ的な扇動をおこない、その影響は軍隊の中にも及んでいることをたびたび政府に報告した。たとえば、ザグレブ駐留の憲兵隊は、ラディッチらがクロアチアに共和制国家を樹立し、現行の国家を分裂させようとしているとし、この策謀には旧ハプスブルク帝国軍の将校、カトリックの司祭、クロアチアの民族団体などが関係していると報告した。もちろん、ダヴィドヴィッチ内閣はこのような報告を虚偽報告として退け、その信

憑性を断固として否定した。しかし、その一方で彼らは軍部が野党の影響力下にあることを強く意識せざるを得なかった⁵⁵。

軍部は、武装蜂起やクーデターの脅威を政府に実感させた点でも、野党の倒閣運動に貢献した。政府は、クロアチアに駐留する部隊がセルビア人の多い地域の役所にだけ武器を供与していることを調査によって把握していた。急進党の幹部と軍幹部が頻繁に接触していることも政府は報告を受けていた。報告の中には、急進党と軍部が緊密な関係を形成することで合意し、その際パシッチが自分の後継者に将軍を指名し急進党の指導を任すことに同意したと告げるものさえあった。このあと一部の将校がクーデターを企てているとの情報が伝えられ、それは外部にも広まった。このような情報が伝えられたのは三度目であったので、10月4日、内相のペトロヴィッチは、よもやそのような行動が起こるとは信じていないと断りつつも、国防相のハジッチ将軍に対し一部の将校の動きを監視することを求めた⁵⁶。

同じ時期、クロアチア共和農民党と政府との関係は急に悪化した。その主要なきっかけになったのが10月5日にラディッチがワラジュディンの集会でおこなった演説である。ラディッチは、野党の圧力に対する政府の軟弱な態度を厳しく批判し、ゆがんだ政局を清算するために総選挙の実施を求めた。問題となったのはそのあとの発言であった。ラディッチは、選挙のあとクロアチア人はザグレブに国会と行政府をもつことを強調し、ヨーロッパ全体の軍縮計画のもとでユーゴスラヴィアの兵力は半減すべきことを主張、アルバニアの分割についてイタリアと合意したという情報を入手したと述べて政府の帝国主義的な政策を批判し、クロアチア人は決してアルバニアに足を踏み入れないことを強調した。これを伝え聞いた国王は激怒し、すぐにダヴィドヴィッチを呼んだ。国王はラディッチの発言を問題にし、ダヴィドヴィッチに即刻退陣を求めた⁵⁷。

何とか国王の怒りを静めたダヴィドヴィッチはすぐさまザグレブに使者を派遣し、憲法と君主制の承認をただちに表明するようにラディッチに求めた。そうしないと、国王は内閣の更迭を断行し、急進党政権が復活してしまうとダヴィドヴィッチの使者は訴えた。これに対して、ラディッチは憲法と君主制を承認してよいと述べたが、支持者のクロアチア人民衆に説明がつかないことを理

由にそんなに急には「転向」できないことを強調した。この直後の10月6日、クロアチア共和農民党は幹部会議を開き、副議長のブレダヴェッツのベオグラード派遣を決定した。ブレダヴェッツは、クロアチア共和農民党は入閣を求めないが、引き続き国民議会ではダヴィドヴィッチ政府とセルビア人とクロアチア人との協定を求める政府の政策を支持するとの声明を政府に伝えた。ところが、10月8日、ステヴァン・ハジッチ将軍が突然国防相を辞任した。ワラジュディンの集会でラディッチがおこなった「敗北主義的な演説」に対して政府が毅然たる対抗措置をとらなかったことが表向きの理由であった⁵⁸。その際、ハジッチは真っ先に辞表を国王に提出し、そのあとにこれを政府に伝えるという行動をとった。ハジッチの辞表は国王の求めに応じて提出されたものだった。

国防相の辞任は政権運営にとって致命傷とはならなかった。ダヴィドヴィッチ政権は議会の多数派の支持を確保していたし、諸民族の和解と協定を求める彼の政策は広範な世論の支持を得ていたからである。政府はただちに世論に支持を訴える戦術をとった。民主党は機関誌を通してこう伝えた。野党勢力は、政府が議会の多数派と世論の支持を得ていて、国民の意思に基づき議会の場でしか倒すことができないことに苛立ち、議会の開催を妨害すると共に軍部の信頼を政府は失ったかのような印象を世論に植え付けようとしている。民衆もこれに好意的に反応した。ちょうどダヴィドヴィッチが宮廷に向かったときに、ベオグラードではダヴィドヴィッチ首相とその政策を支持する大規模な市民集会が開催された。そのあと彼らは、ラディッチとたびたび話し合いをしていた民主党議員と腕を組んで大通りをデモ行進した。これに対して、急進党側もダヴィドヴィッチ政権に抗議する市民集会をベオグラードで予定していたが、人が集まらずに中止された⁵⁹。

10月9日、ダヴィドヴィッチは国王に謁見し、国防相の辞任を理由に内閣改造を実施することを伝えた。国王はダヴィドヴィッチの続投を黙認し、内閣改造の提案を了承したが、政府の政策を支持するあらゆる勢力と入閣交渉をおこなうように指示した。国王の意図はこの機会に急進党を政権に参加させることであったが、ダヴィドヴィッチはクロアチア共和農民党代表の入閣を再び提案するつもりでいた。これまでの難局の中で政府の基本政策にブレがなかったの

は、世論の支持に加えて、クロアチア共和農民党が強力な支持を送り続けていたからであった。ハジッチ将軍が国防相を辞任するやいなや、クロアチア共和農民党の指導部はベオグラードに副議長のマチェックを派遣し、議会外の人物である国防相の辞任によって内閣が退陣するようなことは決してあってはならないとダヴィドヴィッチに伝えた。加えてラディッチは、近くヴルポーリエで演説をし、クロアチア共和農民党を反国家分子に仕立て上げようとする急進党側の策謀を粉碎する声明を出すことを約束した⁶⁰。

10月12日、ラディッチは演説をおこなった。政府は、ラディッチがこの機会に野党の非難を疑問の余地なく否定してくれることを期待した。実際ラディッチは政府側の期待に応えて君主制を承認する用意があることを改めて明らかにした。彼は、セルビア人とクロアチア人の協力の必要性を強調し、セルビア人居住区でもクロアチア共和農民党は選挙運動をおこなうことを告げた。しかし、ラディッチは前政権の批判に必要以上に過激な言葉を使った。彼は返す刀で現政権の優柔不断さを批判し、間接的に国王を批判した。ダヴィドヴィッチ内閣はラディッチの演説を好意的に評価したが、野党はこれを攻撃材料にした⁶¹。

10月11日、国民議会が2ヶ月ぶりに開かれた。与野党は容赦なく相手を攻撃した。政府は前政権の3人の閣僚の汚職を告発し、その証拠を公表した。ここまでは政府側が優勢であったが、すぐに形勢は逆転した。10月14日、急進党は二つの質疑を政府に提起した。一つは、「クロアチア共和農民党の敗北主義的な活動」に関係していた。急進党議員は政府をこう批判した。前政権は、ラディッチがモスクワ滞在時におこなった国を裏切る行為に対してクロアチア共和農民党指導部を厳しく糾弾したが、なぜ現政権は、ハジッチ将軍の辞職の理由に示されていたように、新しい事実が明らかになっているのに彼らの活動に何の対抗措置もとらないのか。もう一つの質疑は、政府閣僚の一部が旅券を取得して国外逃亡に備えていることを暴露するものであった⁶²。

他方、ダヴィドヴィッチは、リュバ・ヨヴァノヴィッチを筆頭に、汚職に関与していない一部の急進党議員を入閣させる交渉を開始していた。これによって、ダヴィドヴィッチは急進党との連立政権を求める国王の意向に応える同時に、野党勢力の一部を切り崩したいと考えていた。しかし、ヨヴァノヴィッチ

は党首のパシッチの代理としてこの交渉を受け、あくまで急進党全体の政権参加を求めた。ヨヴァノヴィッチは、過渡的な大連立政権の形成という国王とパシッチの間で合意されていたシナリオを実現させようとしたのである。10月12日、パシッチはダヴィドヴィッチに書簡を送った。それは、国家の危機と国王が置かれた微妙な状況を考慮して急進党は連立政権に参加することに同意するが、その条件としてダヴィドヴィッチ内閣に辞表の提出を求めると述べていた。急進党の要求は、内閣改造ではなく、政権交代そのものであった。ダヴィドヴィッチとパシッチの見解は相容れず、交渉は決裂した⁶³。

10月14日、政府は閣議を開き、閣僚ポストの入れ替えが不可能になったことを報告した。10月15日、民主党は議員総会を開き、この政局にどう対処するか意見を交わした。総会では次のような見解が提出されていた。国王がどうしても内閣の退陣を求めるなら、このことを理由に辞表を提出してもよいのではないか。その上で政府は、なぜ議会で多数派の支持を得ているのに国王が不信任を表明するのか知りたいと異議を申し立てる必要がある。彼らが議論を始めたとき、首相を国王が緊急に呼んでいると伝えられた。宮廷に駆けつけたダヴィドヴィッチに対して、国王はただちに辞表の提出を求めた。驚いたダヴィドヴィッチは国王に発言を確認した上で、辞表を提出した⁶⁴。

ダヴィドヴィッチは辞職理由を公式にこう説明した。「国王陛下は述べられました。平和、秩序、法治、汚職の根絶、およびセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の間での最終的な協定の締結という我々のこれまでの政策を実行するための基盤を拡大するために、我が内閣は辞表を提出する必要がある。国王陛下がこう表明された以上、私は進んで国王陛下に我が内閣の辞表を提出する」。この文章は二つの事実を示していた。一つは、ダヴィドヴィッチ首相の辞表は国王の要求に応じて提出されたことである。これは、議会で多数派の支持を得ていた政権が議会外の力によって倒れたことを意味した。もう一つは、辞任の目的は、他の政治集団を政権に参加させることによって政権基盤を強化し、この政権の基本政策を継続することにあると述べられたことである。

しかし、ダヴィドヴィッチの辞職の経過と理由は不可解であった。第一にこの国の憲法が前提とする立憲君主制と議会制の見地からは、議会の多数派の支

持を得ている政権に国王が不信任を表明する場合には、これと同時に国民議会議を解散し、国民の意思を問うために総選挙をおこなう権利をその政府に認める必要があった。そうでなければ、専制君主の恣意的な意思による内閣の更迭と区別がつかなくなってしまうからである。第二に政権基盤を強化するために辞職するというのは、すでに議会で多数派の支持を得ている政府としては、おかしな理由であった。もしそれが急進党と独立民主党の政権参加を意味するとすればもっと変な話になる。急進党と独立民主党は、ダヴィドヴィッチ政府の政策とまったく相容れない政策を主張していたからである。

ダヴィドヴィッチが発表した辞任理由は、国王に対する不服の申し立てであり、議会の多数派の支持がある政策を実現するために政権を引き続き担当したいという意欲の表明であった。しかし、もしそうならば、彼らは国王の要求を拒否し、議会の多数派と国民世論に支持を訴えるべきであった。ところが、ダヴィドヴィッチらは国王および野党と正面衝突することを避け、非議会主義的な方法による倒閣に抵抗しなかった。民主党は機関誌で、国王の手続きを、1903年5月にクーデターにより廃位になったオブレノヴィッチ王朝と同様の専制政治の復活と批判するのが精一杯であった⁶⁵。

7 ダヴィドヴィッチ政権の崩壊と P-P 政権の復活

後継首相は、慣例に従って、政治指導者と協議して国王が指名することとなった。しかし、その協議は異例のプロセスをとった。国王は与野党の指導者を宮廷に呼び、自ら議長役を務めて合同会議を開催したのである。

10月17日に始まった与野党の政権協議には与党三党から5人の代表が参加し、野党陣営では急進党から5人の代表が出席した⁶⁶。会議の冒頭、国王は、与党三党と急進党とが話し合っただけで連立政権を形成してもらいたいと表明した。ダヴィドヴィッチが辞表を提出したとはいえ、議会主義政治の原則から見れば、議会の多数派の支持を有する与党連合は引き続き政権を担当する資格があった。したがって、与党連合代表は、この連立政権は現在の内閣を改造したものとなるべきであり、民族間の協定を求める現政権の政策の続行を示すためにも、ダヴ

イドヴィッチに再び組閣権を与えるべきだと主張した。彼らはこの内閣にはクロアチア共和農民党の代表が入閣すべきことも主張した。これに対して、急進党代表はダヴィドヴィッチ政権には参加できないと述べ、新しい政権はそもそもクロアチア共和農民党との協定締結が可能なのかを事前によく検討しなければならないと主張した。クロアチア共和農民党代表の入閣については、そのような議題を検討する権限は自分たちにはなく、改めて党の議員総会に諮る必要があると述べ、議題にすること自体を拒否する構えを示した⁶⁷。

三日間の協議で与野党が一致したのは、首相の任命を国王の裁定に委ねるということだけだった。それ以外の点では両者の主張はまったくかみ合わなかった。しかし、交渉の主導権を握っていたのは急進党であった。議論は急進党代表が提起した条件をめぐってのみ進行した。与党連合は、新政権の主要課題はセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の最終的な民族間協定の準備をおこなうことだとしたが、急進党側は新政権の基本政策について話し合うことを避けた。これを議論すれば与党連合の土俵で勝負することになるからであった。彼らは議論を自分らの土俵に持ち込み、クロアチア共和農民党の入閣条件を執拗に主張した。与党三党代表は国王に対して覚え書きを作成し、急進党代表がまったく譲歩の姿勢を示さないことを強く訴えた。しかし、国王の支持は自分らの側にあることを知っていた急進党側は譲歩する意思は微塵もなかった⁶⁸。

与野党の協議は進展を見せることなく、一時中断した。10月20日に国民議会が再開され、議会執行部の選挙が実施されることになったからである。このうち、国民議会議長は議会を代表して首相候補者を国王に推薦する権限をもつ要職であったため、与野党ともに是非とも自陣営に押さえたいと考えたポストであった。与党三党とクロアチア共和農民党は当初、クロアチア共和農民党副議長のマチェックを議長候補とし、副議長を民主党とスロヴェニア人民党から出すことで合意していた。他方、急進党代表は、議会の執行部職のすべてを急進党に譲ることを求めた。両者の争いに決定的な影響を与えたのは宮廷からの圧力であった。パシッチを首相とする急進党と独立民主党との連立政権の閣僚を任命する勅令、ならびに議会の解散および総選挙の公示を告げる勅令が宮廷からダヴィドヴィッチに届けられたのである⁶⁹。

ダヴィドヴィッチは急進党と取引を試みた。議長選挙では与党連合はヨヴァノヴィッチに投票する代わりに、ダヴィドヴィッチ政権の暫定的な復活を議長が国王に助言し、そのあとで連立政権の協議を再開することを提案した。しかし、急進党側は無条件に議会の執行部全体を譲ることを求めた。交渉は折り合いがつかず、時間切れとなった。結局、国王の意向を考慮したダヴィドヴィッチは宮廷側と真正面から衝突することを避け、マチェックに議長職への立候補の断念を求める一方で、急進党のヨヴァノヴィッチに投票することを与党議員に求めた。この結果、議長にはヨヴァノヴィッチが再選され、第一副議長にクロアチア共和農民党のマチェック、第二副議長にスロヴェニア人民党のヨシブ・ホーニェッツが選ばれた⁷⁰。

民主党はこの結果に満足していた。とくに二人の副議長と書記局を与党側が押さえたことは上出来だと考えていた。しかし、クロアチア共和農民党は選挙結果および民主党の対応の仕方に不満を隠さなかった。彼らは、ヨヴァノヴィッチへの投票をクロアチア共和農民党議員にも要請したことについて、ダヴィドヴィッチを強く非難した。クロアチア共和農民党指導部は、ヨヴァノヴィッチを宮廷の黒幕と結託した人物として非難し、彼には投票しないことを決めていたからである。他方、議長職だけでなく全執行部職を独占することを欲していた急進党側も、選挙結果には満足していなかった。急進党は、与党連合は議長選挙に関して国王に約束した義務を果たさなかったと宣伝し、これによって政権協議も台無しになったと主張した⁷¹。

しかし、選挙結果にもっとも大きな不満を示したのは国王であった。彼はただちに内務次官を呼び、与党連合が約束を果たさず、議会の執行部全体を急進党側に譲らなかったことに抗議した。国王は、とくにクロアチア共和農民党のマチェックが第一副議長に選出されたことが不満であった。ただ国王は、議会執行部の選挙結果を受けて与党連合の地歩が改善したことを考慮し、入閣問題について国王の意向に沿うようにもう一度クロアチア共和農民党に働きかけたというダヴィドヴィッチの要請を了承し、二つの点についてラディッチが明確に説明することを求めた。一つは第三インターナショナルとの関係であり、もう一つは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の協定政策を最終的

にどのような形で実行できると考えているのかであった⁷²。

ラディッチは、10月23日におこなった演説の中で回答を与えた。(1) クロアチア共和農民党は農民インターナショナルに加盟したが、その綱領は一句たりとも変えていない。(2) クロアチア人民は引き続きセルビア人民との協定の締結を望んでいる。しかし、それは、ユーゴスラヴィアの国境の枠内で「独立した農民の国としてのクロアチア」をもたらす協定である。(3) クロアチア共和農民党は国民議会に議員を派遣することによって、立憲君主制国家の政治にすでに参加している⁷³。これらはダヴィドヴィッチの要請に応え、国家の統一性を承認すると共に第三インターナショナルとの関係を否定する発言であった。

しかし、ラディッチは、議長選挙で示された宮廷側の圧力に不満であり、断固とした抗議姿勢を示す必要があると考えていた。したがって、彼の演説はベオグラードの支配層に対する抗議の部分が主要であるような印象を与えた。ラディッチは、ダヴィドヴィッチ政府を暫定政権と呼び、国民議会議長選挙を含めて、彼らが宮廷の圧力にことごとく屈してきたことを非難した。このような宮廷と政府の試みは、セルビアの支配を維持し、クロアチア共和農民党を政治的に弱体化させることをねらって、セルビア人政党を糾合しようとしたものだとラディッチは特徴付けた。最後にラディッチは次のように述べた。「もしベオグラードが軍事政権のような態度を続けるならば、我々は独自の行動を起こすだろう。ヨーロッパは独自の行動を起こし、我々は完全な国家的独立を打ち立てるだろう。ソヴィエト政府は、我々が危機に瀕した場合には支援を与えると外相チチェリンを通して我々に約束している」⁷⁴。これはセルビアの支配層に対する脅迫と受け止められた問題発言であった。

ラディッチの演説は二つの箇所国王の神経を逆撫でした。クロアチアの独立要求とソヴィエト政府の支援の約束である。国王はダヴィドヴィッチにクロアチア共和農民党との関係をいっさい断つように指示した。彼は自らメッセージを作成し、これを与党三党の名で発表するようにダヴィドヴィッチに要求した。それは、ラディッチがクロアチア人の代表を名乗り、その名において発言する限り、彼との協定の成立はありえないとするものであった。しかし、ダヴィドヴィッチが起草した声明はずっと控えめなものであった⁷⁵。10月25日、与

党三党は公式に次のような声明を発表した。「ラディッチ氏の演説ならびにクロアチア共和農民党の決議は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の協定締結のために献身的努力をしているすべての政治集団に手痛い打撃を与えた。…このあと、与党連合をめぐる状況は非常に悪化し、その活動の成功の見込みは極小化されてしまった」⁷⁶。

ラディッチの演説は与党三党を困惑させた。とくに大きく動揺したのは民主党であった。民主党のメンバーの中にはダヴィドヴィッチの路線に懐疑的であった者が少なからずいた。それゆえ、民主党が政権喪失の可能性が高まったとき、彼らは狼狽し、クロアチア共和農民党との協調路線を放棄することを求め始めたのである。ダヴィドヴィッチ自身もこのとき党内の多数派の支持を得られないことを認めた。他方、与党三党以外でダヴィドヴィッチ政権を支持していた農業者党も、政府が公約を果たさなかったことを理由に、今後は支持をしないとの声明を発表した⁷⁷。政府が最大の拠り所にしてきた「議会の多数派の支持」は内外から徐々に崩れ始めたのである。

この機をとらえて国王は一つの策略を仕掛けた。10月28日、民主党幹部のコスタ・ティモティエヴィッチを首相に指名し、連立政権の形成を指示したのである。ティモティエヴィッチはプリビーチェヴィッチに同調してクロアチア共和農民党との連携に反対していた人物であり、急進党と良好な関係をもっていた政治家であった。ところが、国王はティモティエヴィッチに対し、ダヴィドヴィッチ政権の基本政策を継続するように指示した。これを受けて、ティモティエヴィッチは次のような方針を明らかにした。(1)この政府はダヴィドヴィッチ政権が議会に提起した議案(反汚職法、農業者融資法など)の制定をめざす。(2)政府は法令を遵守し、万人を法の下に平等に取り扱う。(3)政府は引き続き協定締結に向けてクロアチア人代表との話し合いをおこなう⁷⁸。

ティモティエヴィッチの首班指名は国王による一本釣り人事であり、与党三党には何の相談もなかった。ダヴィドヴィッチら民主党の指導部は、ティモティエヴィッチがクロアチア人との連携につねに反対の態度をとってきたことを理由に、この人事の承認に留保姿勢を示した。しかし、ティモティエヴィッチは民主党の議員総会の支持を取り付けて、組閣の作業を開始した。彼は、与党

連合内の不信の目を意識して、一定の条件を満たせばラディッチらのグループが入閣することに反対ではないと表明した。その上で与党三党のうちまずスロヴェニア人民党とユーゴスラヴィア・ムスリム組織に政権参加を要請した。しかし、スロヴェニア人民党は、ティモティエヴィッチが示した方針を急進党が受け入れるかどうかまだ明らかにしていないことを理由に政権協力を留保した。ユーゴスラヴィア・ムスリム組織もほぼ同様の回答であった⁷⁹。

組閣が難航している間に新たな事態が発生した。きっかけは、10月28日にクロアチア共和農民党幹部が憲兵に叩かれ、意識不明の状態での病院に運ばれたことであった。11月1日、クロアチア共和農民党はザグレブで抗議集会を開いた。演説をおこなったラディッチは、与党三党についてもその態度を辛辣に批判した。彼は、ダヴィドヴィッチに対しては、議会の多数を代表する政権の形成を要求せず、さりとて議会主義勢力を一つにまとめて野党に転じるという気もないと述べて、方向性がはっきりしない方針をとっていることを批判した。ラディッチは返す刀で国王の政治干渉を厳しく非難した。これを報じたベオグラードの新聞は、「まるでこの国には憲法どころか効力のある法律がないかのように」国王は行動しているとラディッチが述べたことを伝えた⁸⁰。

11月2日、与党三党の代表者はラディッチに電報を打ち、前日の演説は与党連合（四党間の議会共闘）の解散を意味しているのかと問い質し、ただちに返答することを求めた。これに対して、11月3日、ザグレブのクロアチア共和農民党指導部はこう答えた。「四党間の連携はもちろん必要不可欠だが、これを継続するには条件がある。それは議会の多数派として政権獲得を断固として求めるか、それとも議会と国民の中に足場を置いた戦闘的な野党に転じるかだ」⁸¹。

クロアチア共和農民党の回答は議会の多数派と世論の支持を維持する戦術の確認を与党三党に求めていたが、彼らは依然として腰の定まらない態度を続けた。政局のもう一つの焦点は、急進党がティモティエヴィッチの示した基本方針にどのような態度を示すかであった。ティモティエヴィッチはダヴィドヴィッチ政権の政策の継続を表明していたので、与党三党の指導部は、急進党は新政府の方針には賛同しないに違いないと考え、急進党の正式な態度表明が出るのを待って最終的に政権協力を拒否するつもりでいた。これに対し、急進党は

回答を先延ばしにしていたが、11月4日、意外にも彼らはティモティエヴィッチが示した三方針を基本的に承認することを明らかにした。

今度は与党三党が態度を明らかにする番であった。彼らは急進党がティモティエヴィッチの方針を承認し、政権参加の態度を示したことに困惑した。彼らが政権協力に応じなければ、ティモティエヴィッチ政権は彼らの責任により成立しなかったと指摘される恐れがあった。しかし、だからといって急進党とともに新政権に加わることもできなかった。そうなればクロアチア共和農民党の支持を失い、与党三党は「議会の多数派」を維持できなくなってしまう。結局、11月5日、民主党は議論の末、政権参加の拒否を示唆する声明を出した。急進党の回答は国王の意向に沿うものではないこと、また党機関誌の主張から判断して急進党がティモティエヴィッチの政策を継続していくとは考えられないことがその理由であった⁸²。ユーゴスラヴィア・ムスリム組織もほぼ同様の理由を指摘し、急進党の態度によって挙国一致の連立内閣の形成は不可能になったと表明した⁸³。一方、クロアチア共和農民党の指導部は与党三党の決定を歓迎した。11月5日夜、彼らは与党三党が既定の方針を維持し、議会主義的方法による解決の展望が開けたとみなし、与党連合の活動を継続するため副議長のマチュックとブレダヴェッツをベオグラードに派遣することを決定した⁸⁴。

11月5日、与党三党の回答を受けて、ティモティエヴィッチは組閣権を国王に返上した。翌日、国王は、急進党のパシッチを首相に指名し、選挙管理内閣の形成を指示した。パシッチはダヴィドヴィッチに書簡を送り、憲法問題について急進党と政見を共有することを条件に民主党の政権参加を求めた⁸⁵。パシッチの申し出の意図は明らかであった。彼は、党内部に指導部の方針を承認しないメンバーを抱えていることを見越して、民主党を動揺させ、これを再び急進党との連立政権に誘い込もうとしたのである。その際、ダヴィドヴィッチらが孤立して民主党から排除されればベストであった。これがうまくいけば、四党連合は崩壊し、これに代わって強力なセルビア人政党の与党連合が出現する。そうなれば、総選挙を有利に実施できるし、クロアチア共和農民党を解散させるために強硬な法的措置をとることも可能であった。しかし、民主党がパシッチの提案を拒否したとしても、プリビーチェヴィッチの独立民主党との連立と

いうオプションをもっていたので、パシッチは困らなかった。それゆえ、パシッチは余裕をもって民主党の回答を待った。

民主党はこのような見え透いた計略には引っ掛からなかった。注目された民主党の議員総会では、ほぼすべての議員がパシッチの提案を拒否する執行部案に賛成した。反対に回ったのは二人の議員だけであり、その一人はティモティエヴィッチであった。11月6日、ダヴィドヴィッチは、パシッチの申し出を断る書簡を送った。この結果を受けて、パシッチは予定通り、急進党と独立民主党との連立政権を復活させた。政権を失った民主党は、これまでの経過はすべて議会主義とこれに基づく政権を倒し、急進党とその専制政治を救済するために仕組まれた策略だったと総括した。クロアチア共和農民党は、マチェックを通して、パシッチとプリビーチェヴィッチの政権の復活を、クロアチア人とスロヴェニア人に対してだけでなく、すべての非セルビア人に対する野蛮な暴力ないし戦争を直接的に告げる事件と断罪した⁸⁶。

民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織とクロアチア共和農民党は結束を強め、11月7日、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国の人民と民族間協定の支持者に向けて」という公告を公表し、「無責任なファクターが人民の自由な意思決定に介入することを許さないための闘い」に加わるように呼びかけた⁸⁷。これに対して、11月10日、政府は国民議会を解散し、1925年2月8日に総選挙を実施する勅令を公布した⁸⁸。これによって、パシッチ政府は選挙管理内閣として、議会に説明責任を負うことなく、政権を担当する権限を手にした。他方、議会が解散されたため、議席を失った四党連合はもはや「議会の多数派」ではなくなったのである。

8 1924年の政変の意味

1918年の建国以来、ユーゴスラヴィアでは、セルビア人と非セルビア人の対立、とくにセルビア人とクロアチア人との対立が激化する過程が進行した。諸民族の相互理解と寛容を唱えたダヴィドヴィッチ政権の成立は、この民族間抗争の激化を緩和し、ユーゴスラヴィア社会にもう一度建国の理念を想起させる

試みであった。ダヴィドヴィッチ内閣は、セルビア人、スロヴェニア人、ムスリム人の閣僚から構成され、これにクロアチア人代表の閣僚を加えれば、ユーゴスラヴィアにふさわしい政権になるはずであった。しかし、ダヴィドヴィッチ政権はその構成の点でも基本政策の点でもやはり過渡的な政権であった。致命的となった問題点をいくつか指摘したい。

第一に民主党はセルビア人の一部を代表する勢力でしかなかったことである。旧セルビア王国、ボスニア・ヘルツェゴヴィナおよびヴォイヴォディナのセルビア人がもっとも支持する政党は急進党であった。クロアチアのセルビア人がもっとも支持する政党は独立民主党であった。したがって、大多数のセルビア人は野党を支持し、与党の民主党はセルビア人を代表して民族間の協定政策を遂行する資格がなかったのである。このことは野党も国王もダヴィドヴィッチ政権の根本的な矛盾とした⁸⁹。それどころか、クロアチア共和農民党も同じ見解であった。彼らは、交渉資格のない「暫定政府」には国家制度に関して決定的な態度表明はできないという考えから、野党と国王の攻撃に悲鳴を上げていた政府の救援要請に十分な対応を示すことができなかった。

第二にダヴィドヴィッチ政権はクロアチア共和農民党の協力に依存していたことである。政府を支える与党は、民主党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織から構成されていたが、三党の議席数だけでは過半数に足りず、議会第二党のクロアチア共和農民党の支持を必要不可欠としていた。しかし、そのためにダヴィドヴィッチ政権は発足と同時に、反国家的で親共産主義な集団に支えられていると野党から批判された。これには軍部も同調した。さらに決定的な打撃は、ダヴィドヴィッチ政権は国王からも疎んじられたことである。ところが、政府は、クロアチア共和農民党の入閣によって政権基盤を強化しようとした。野党と国王はこの動きに倒閣の好機を見出し、入閣承認の前提条件として、クロアチア共和農民党に党綱領の否定を宣言させることを政府に求めた。これは野党側の思惑どおりにラディッチらの反発を招き、その「問題発言」をとらえて、国王はダヴィドヴィッチ首相を辞任に追い込んだ。

第三に民主党はヴィードヴダン憲法の遵守を綱領にしており、とくに君主制を擁護している点では急進党と大差がなかったことである。民主党は二年前ま

で急進党と連立政権を組んでいたし、もっと遡ればダヴィドヴィッチらは急進党を離党し、独立急進党を名乗ったグループであった。たしかに、ダヴィドヴィッチらは急進党よりもリベラルな考え方をもち、それゆえ、民族間関係や国家制度に関しても寛容な政策を打ち出した。しかし、それは政権獲得のための戦術的な主張であり、原則的立場の表明ではなかった。それゆえ、ラディッチの発言を口実に宮廷と野党が圧力を強めたときに、ダヴィドヴィッチ政府は、議会と世論の支持に訴えて断固抵抗する姿勢を示すことができず、腰の定まらない態度をとり続けた。その結果、ダヴィドヴィッチは、議会の多数派の支持をもちながらも、国王からの辞任要求に屈服し、非議会主義的な方法による倒閣を簡単に許してしまったのである。

ダヴィドヴィッチ政権は諸民族の間に相互理解と寛容の雰囲気を作り出すことを課題とし、とくに中央政府とクロアチア人との関係改善を重視したが、その政権基盤の脆弱性の故に、「クロアチア問題」に解決の道筋を付けることができなかった。それでは問題解決に向けて一步も前進がなかったのかというと決してそうではない。一見すると対極的な立場にある急進党および国王とラディッチは、実際には徐々に接近しつつあった。セルビアの支配層は二度の総選挙を通して大きく成長したクロアチア共和農民党を無視するわけにはいかなかったし、クロアチア共和農民党は協定締結のためにセルビア人を代表する急進党を交渉のテーブルに引っ張り出したいと一貫して考えていたからである。

1923年の総選挙後、現実主義的なパシッチはクロアチア人に対する見方を変えた。彼らの不満は、バルカン戦争後にトルコから獲得した南セルビアでおこなったように力の行使によって単純に抑えつけることができないし、その他の少数民族の不満のように少しばかりの利益供与によって沈静化させることもできない性質のものであった。それにパシッチは、ラディッチの農民運動がクロアチア人居住地を越えてセルビアに波及し、急進党の地盤を脅かすような事態になることをもっとも恐れた。それゆえ、パシッチは、単独政権を維持するためとはいえ、自ら歩み寄って宥和政策をとり、「マルコ議定書」をラディッチと結んだ。しかし、これは政権の地歩を固めるための一時的な和議であり、クロアチア共和農民党はやはり交渉の相手にならないと判断した急進党は再び彼ら

に対決する姿勢に転換した。

国王はたしかにクロアチア共和農民党の綱領に反感をもっていた。またモスクワと手を結んでベオグラードに圧力をかけようとするラディッチの行動は論外であり、犯罪的行為であるとみなしていた。しかし、その国王もクロアチア人に君主制を認めさせる必要性を感じていた。その証拠として、国王はクロアチア共和農民党の入閣を無条件に拒否したわけではなかったことがあげられる。「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の国王である以上、クロアチア人の代表が政府に加わることに国王は反対できないはずだとダヴィドヴィッチは考えたが、そのこと自体は正しかった。いずれにせよ、ダヴィドヴィッチ政権の成立によって国王はクロアチア共和農民党の認知を視野に入れざるを得なくなった。それに議会政治の外部に位置する国王は、パシッチやプリビーチェヴィッチなどの政党指導者がそうであったように、ラディッチを同じ土俵で敵視する必要はなく、それだけクロアチア共和農民党を受け入れる余地が大きかった。ただし、現状のままではラディッチらを認知できない点で国王はパシッチらと見解が一致し、クロアチア共和農民党を屈服させ、その綱領を変えさせる路線を承認したのである。

他方、クロアチア共和農民党もまたダヴィドヴィッチ政権を支援することにより、ベオグラードの政治制度に大きく接近した。もっとも、このとき彼らのシナリオは、総選挙のあとにセルビア人の過半数を代表する勢力と交渉をおこない、国家制度に関する協定を締結することにあつた。したがって、この段階では国王と野党が求めたような党綱領を完全に否定するような態度表明はできなかった。それにあまり急な政策転換は支持者のクロアチア人民衆に対して説明が付かず、次の総選挙を考えると得策ではなかった。しかし、このような制約にもかかわらず、彼らはダヴィドヴィッチの求めに応じて、国家の統一性と君主制を承認する姿勢を示した。それは将来の交渉を見据えて、クロアチア共和農民党の態度の変化をベオグラードの支配層に告げるメッセージであつた。

このようにラディッチもまた現実主義的な政治家であつた。ところが、クロアチア人民衆の前で表明されるラディッチの態度は、その他の機会で表明される態度とはつねに異なっていた。ラディッチは民衆の前ではベオグラードへの

接近を否定しようと努め、セルビアの支配層を必要以上に過激な言葉で批判し、その神経を逆撫でした。そのため、発言の本旨でない部分を問題視され、結果的に野党と国王の思いつぼにはまって、ダヴィドヴィッチ政権の崩壊を促すことになった。こうした慎重さを欠く発言はラディッチの性格上やむを得ないものであったかもしれないが、ダヴィドヴィッチ政権の崩壊と P-P 政権の復活は彼自身とその党に大きな打撃を招いた。それによって、彼らが期待していた自由な選挙が不可能になっただけでなく、パシッチとプリビーチヴィッチは、まもなく国家保安法をクロアチア共和農民党に適用し、ラディッチら党幹部を逮捕することになったからである。

この国の憲法は議会政治を前提としながらも、国王に対して、議会に優越する権限を認めていた。これは、憲法の制定時に共産党やクロアチア共和農民党などの政党が民衆の支持を得て勢力を伸ばすことを恐れて政府がとった措置であった。もちろん、憲法上国王は議会の意向を尊重することを求められていたが、それは精神的な規定であり、絶対的な前提ではなかった。したがって、国王は、場合によっては議会の意向を無視し、独自の判断で政権を選択する余地を認められていた。そのため、ダヴィドヴィッチ政権は議会の多数派の支持をもちながら、非議会主義的な方法で崩壊させられた。1924 年は憲法に組み込まれていた専制主義の可能性が早くも表出した点でも注目すべき年であった。

註

¹ Branislav Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1979, p.139-149 による。

² 急進党、クロアチア共和農民党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織、ジェミット党、ドイツ人党。

³ 彼らは、1910 年の人口調査をもとに議員定数を割り振り、戦争による人口減が大きかった旧セルビア王国の選挙区により多くの議席を配分した。これは旧セルビア王国を地盤とする急進党に有利に作用した。たとえば、総得票数を議席数で割れば、クロアチア共和農民党は 6768 票で 1 議席を得ているのに対して、急進党は 5206 票で 1 議席を獲得していた。急進党は、地盤が競合する民主党を政権から追放して単独政権で選挙を実施し、しかも選挙直前の 3 ヶ月だけで民主党支持の官吏を 3000 人も更迭して、選挙運動を有利に進めた (Branislav Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1970, p.342)。

⁴ もっとも、このブロックはゆるやかな提携関係であり、共闘組織ではなかった。三党

の綱領は大きくかけ離れている上に、ブロックの共通の政策の合意もなかったし、ブロックを代表する合同の代表機関も設置されなかった。

⁵ 以上、主としてRudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, pp. 166-167、Hrvoje Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, Naklada Pavičić, Zagreb, 1999, pp. 143-144 による。

⁶ ザグレブを訪問するにあたり、ジュリッチとヤニッチはパシッチら党幹部から課題を与えられていた。それは、クロアチア共和農民党にとって急進党と協力のための最低限の条件は何かを探ることであった (*ibid.*, p.145)

⁷ Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, p. 168.

⁸ Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 152.

⁹ ラディッチと連邦主義ブロックは、急進党と民主党の連立政権が復活し、中央集権主義者のプリビーチェヴィッチ・グループの影響力が高まることを恐れていた。だから急進党単独政権の形成は彼らにとっても好都合だった。

¹⁰ 国民議会の議長は、憲法の規定によって政治危機の際に国王の助言者として行動し、首班指名に大きな影響を与える。急進党がラディッチに対する宥和政策を続けた理由の一つは、クロアチア共和農民党に議会への不参加を続けさせ、その間に国民議会議長のポストを急進党に確保しておきたいからであったと後に急進党幹部のラーザ・マルコヴィッチは語っている (Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 264)

¹¹ *Ibid.*, p. 152.

¹² Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 254、Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p. 147.

¹³ Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 154.

¹⁴ Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p. 263、Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, p. 184. なお急進党の政策転換を知ったプリビーチェヴィッチはパシッチの演説を拍手で歓迎したという。

¹⁵ Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 154.

¹⁶ 急進党を代表してマルコ議定書に署名したマルコ・ジュリッチはこう述べた。そもそも急進党は、ザグレブでの話し合いで提示された条件を受け入れたわけでも了承したわけでもない。急進党代表の署名の意味は、クロアチア共和農民党代表が要求として提起したものを認めるということであった。ところが、クロアチア共和農民党代表はその後の話し合いの中で国家制度をどのようにしたいのかその構想を明らかにしなかったため、急進党はこれ以上の交渉を中止する (*Ibid.*, p.154)

¹⁷ *Ibid.*, p. 155、Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, p. 151.

¹⁸ Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, p. 184.

¹⁹ Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 155.

²⁰ Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 353.

²¹ *Ibid.*, pp. 354-355.

²² これについては、バルカン情勢に詳しく第一次世界大戦中にユーゴスラヴィア委員会の活動の協力者であった歴史家のシートン＝ワトソンでさえ同じ態度であった。彼は、急進党が大セルビア主義の実現を望んでいることはよく承知していたとした上で、それゆえにこそ、クロアチア共和農民党は議会に参加してこれに対抗しなければならないとラディッチに述べた (Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, pp. 157-158)

²³ ロンドン滞在中には、イギリス国家警察の委任を受けた私立探偵のマッソンがラディッチの護衛役としてついていたが、このマッソンはベオグラード政府と極秘にスパイ契約を結び、ラディッチのロンドンでの行動を逐一ロンドンのユーゴスラヴィア大使館に報告していた。ラディッチがロンドンを去った理由の一つは、このことを察知したことにもあった (Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, p. 188)

²⁴ 会談のあと、クロアチア共和農民党の指導部は、急進党政権打倒に必要な数の議員を国民議会に派遣するが、次の総選挙が実施されるまでは国家制度の問題を協議の対象としないことを幹部会議で決議した（Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 357）。これによって、クロアチア共和農民党は、民主党との共闘を承認するが、民主党が提案する国家制度の改革案（「地方自治の広範な拡大」）は受け入れられないことを、彼らは確認した。

²⁵ このほか野党勢力がめざす新政府は次のような課題をもつとされた。国家行政機構の改革、腐敗と違法行為の根絶、党派性を排除した官僚制度の形成、喫緊の重要法案（戦傷者補償法、行政組織法、地方自治法、地方自治体法、農業者融資法、徴税平準化法など）の採択と施行（*ibid.*, p. 359）

²⁶ Hrvoje Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995, p. 111.

²⁷ 出席した議員のうち、セルビアから選出された議員はほぼ全員が野党ブロックの協定に賛成した。これに対して反対票を投じたのは、プリビーチェヴィッチを筆頭に主として旧オーストリア＝ハンガリー地域から選出された議員であった（*ibid.*, p. 111）

²⁸ 野党ブロックの形成後もスロヴェニア人民党とユーゴスラヴィア・ムスリム組織はクロアチア共和農民党と強い結びつきを維持していた。民主党にはプリビーチェヴィッチ派が残っていたので、連邦主義ブロックの指導者は、民主党が野党ブロックとの協定を破棄して急進党と手を結ぶかもしれないという懸念を共有していた。したがって、彼らは、野党ブロックの成立後、万一民主党の裏切りによって政権打倒が失敗に終わった場合にはただちに国民議会をボイコットし、議会外の活動に転じることを申し合わせていた（Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 359）

²⁹ 以上は、Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 114 による。

³⁰ 以上の経過は、*ibid.*, pp. 114-115 による。

³¹ この内閣は突然成立したのではなかった。プリビーチェヴィッチと急進党は2月から水面下で交渉を始めていた。興味深いことは、彼らの交渉をダヴィドヴィッチ派は大方感知していたことである。3月15日付けの民主党系の雑誌『反響』は、「民主党から27人の議員を引き連れた場合には5つの閣僚ポストを、15人の場合には3つのポストがプリビーチェヴィッチに提供される」という噂を報じていた（Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 361）。党首のダヴィドヴィッチは、プリビーチェヴィッチ派の離脱が避けられなくなった場合でも、分党状態にするのではなく、母体となる民主党を保全したいと考えていた。そうすればどちらに付くか態度を決めかねている中間派の議員は、分派分子のレッテルを貼られることを恐れて民主党に残るに違いないと計算していたからである。プリビーチェヴィッチ派は離党という形で出て行ったため、事態はダヴィドヴィッチの思惑どおり進み、被害を最小限に食い止めることができた。プリビーチェヴィッチに追随して民主党を離党した者は14人と比較的少数にとどまったからである（*ibid.*, p. 362）

³² もっとも、急進党幹部の中には、クロアチアのセルビア人の代表であるプリビーチェヴィッチとセルビアのセルビア人を代表する急進党が組むと「セルビア人連合」の色彩があまりに強くなり、他の民族に反感をもたれることを懸念する者もいた。たとえば、リュバ・ヨヴァノヴィッチは、スロヴェニア人民党と連立政権を組んだ方がセルビア人色は薄まってよりましたと考えていたが、スロヴェニア人民党代表のコロシェッツは急進党との連立を拒否したため、次善の策としてプリビーチェヴィッチ派との連立政権を承認したのであった（Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 114）

³³ このほかにプルヴィスラフ・グリソゴノは法相、スヴェティスラフ・ポポヴィッチは交通相、ヒンコ・クリズマンは商工相として入閣した (*ibid.*, p. 116)。さらにヴェツラフ・ヴィルダーは内務政務次官、スレテン・ヴコサブレノヴィッチは農業改革担当政務次官に就任し、加えてプリビーチェヴィッチ派を支持する党員は一定の数の郡長官の地位を得ることが急進党と申し合わされた (*ibid.*, p. 130)。

³⁴ 議員資格の審査委員会は、21人の委員で構成されていたが、このうち急進党の委員は9人、独立民主党の委員は2人であり、与党側は過半数(11人)を制して、委員会の主導権を握っていた (Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mucilistu*, p. 189)。

³⁵ Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 163.

³⁶ Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 135.

³⁷ Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 164.

³⁸ Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 375

³⁹ *Ibid.*, p. 376.

⁴⁰ *Ibid.*, p.377.

⁴¹ P-P政権復活の背景には、国王にとってこれ以上解決を先延ばしできない差し迫った事情があったようである。軍部はダヴィドヴィッチの首班指名に反対し、クーデターの構えでパシッチの首相再任を迫っていたことを示す資料や当事者のパシッチ自身が極秘資料の公表をほのめかして国王に圧力をかけていたとされる資料があることをグリゴリエヴィッチは紹介している (*ibid.*,p.377)。

⁴² *Ibid.*, p. 195、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 165、Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 379.

⁴³ テキストは、Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, pp. 196-198 による。

⁴⁴ この加盟申請はラディッチが独断でおこなったので、正式な決定とするには党組織の承認を必要とした。8月3日、ラディッチの指示により、ザグレブでクロアチア共和農民党の議員総会が開かれた。副議長のブレダヴェッツは、ラディッチのモスクワでの行動を承認するように求めた。しかし、農民インターナショナルへの加盟を認めれば、クロアチア共和農民党は共産主義勢力だという格好の攻撃材料をプリビーチェヴィッチやパシッチに与えることになるとして、一部議員が反対動議を提出した。これに対して、もう一人の副議長のマチェックは、これを認めないとモスクワのラディッチの命が保障されないかもしれないと述べて、理解を求めた。ルドルフ・ホルヴァートは条件付きで承認をすることを提案した。それは農民インターナショナルに加盟したとしても、クロアチア共和農民党が今後も独自の綱領を維持するという付帯条件を付けることであった。彼の提案は反対派にも受け入れられ、この条件を付けてラディッチの行動は満場一致で承認された (Rudolf Horvat, *Hrvatka na Mučilištu*, p. 203)。

⁴⁵ Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp. 392-393.

⁴⁶ 9月21日、ダヴィドヴィッチが国王と話し合いをしていたとき、クロアチア共和農民党副議長のマチェックは民主党との交渉について、ベロヴァールの集会でクロアチア人民衆にこう説明していた。「我々はベオグラードで民主党にいつてやった。憲法の修正提案が出たら、クロアチア人議員とスロヴェニア人議員はほとんどがこれに賛成するが、セルビア人議員はあなた方30人しか賛成しないだろう。これではセルビア人が憲法の修正を承認したとはいえないだろう。だから選挙を打って、民主党は、30人どころか100人以上の議員を獲得しなければならないと」(*ibid.*, p.394)。

⁴⁷ 以上、*ibid.*, p.395。

⁴⁸ 以上、*ibid.*, pp. 395-396。

⁴⁹ 以上、*ibid.*, pp. 396-397。

⁵⁰ これを端的に示すのが、ダヴィドヴィッチ内閣が求めていた行政官僚の交代の勅令の署名を先延ばしにしていたことである。そのため、急進党政権の時代に任命された官僚が政権交代後も要職に居座っていた。急進党や独立民主党は、これらの行政官僚を通してダヴィドヴィッチ政権の仕事を妨害することができた。

⁵¹ Branislav Gligorijević, *O pitanju ulaska predstavnika HRSS u Davidovićeve vladu i o križi i padu te vlade, Istorija XX veka*, zbornik radova, Beograd, 1965, p. 365.

⁵² 別荘に滞在していた国王は、ベオグラードに戻る週末に首相のダヴィドヴィッチと会う約束をしていた。その際、ダヴィドヴィッチが再度クロアチア共和農民党の入閣の承認を国王に求めてくるのは明らかであった。そのため、国王はダヴィドヴィッチの要請をどのような理由で断ったらよいか、パシッチに助言を求めた (*ibid.*, p. 366)。

⁵³ 興味深いのはパシッチに対する国王の態度の変化である。傑出した政治指導者の存在を嫌った国王はつい少し前までパシッチの権威を貶め、急進党指導部から排除することをねらっていた。たとえば、二ヶ月前、ダヴィドヴィッチ内閣が成立する前に、急進党幹部のリュバ・ヨヴァノヴィッチを首相に指名し、組閣をおこなわせようとした。これはすでに述べたように、パシッチの反撃にあって失敗した。しかし、いまやこの計画は別の機会にとっておき、国王はパシッチの権威と知謀を利用しようとしたのである。もちろん、老獪なパシッチはこのことは十分承知していたと思われる。ダヴィドヴィッチ政権を打倒するためには国王の権威と助力が必要であったからである。そのため、パシッチはあえて自分は参加しないことを明言して、挙国一致連立政権による暫定政府の形成を国王に進言したのである。

⁵⁴ 以上、*ibid.*, pp. 368-369。

⁵⁵ 以上はGligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, pp. 416-417 による。

⁵⁶ 以上、*ibid.*, pp.417-418。

⁵⁷ 以上、Gligorijević, *O pitanju ulaska predstavnika HRSS u Davidovićeve vladu i o križi i padu te vlade*, pp. 373-374。

⁵⁸ 以上、*ibid.*, p.376。このほかハジッチは、ザグレブおよびトラヴニクの部隊に対してクロアチアの民族主義者がおこなった襲撃に対して政府が対抗措置をとらなかったこと、内相のペトロヴィッチがクーデターを準備しているとして一部の将校の動きを監視することを求めたことを辞任の理由にあげた。

⁵⁹ 以上、*ibid.*, p.378。

⁶⁰ 以上、*ibid.*, p.378。

⁶¹ 以上、*ibid.*, p.379。

⁶² 野党側は議会外でもクロアチア共和農民党を挑発した。10月12日には、武装したオルイナの団がスルナオやチェトニクのメンバーと共にヨシプ・ブレダヴェッツの政治集会を襲撃した。これは、自衛のために反撃したクロアチア共和農民党の支持者がオルイナのメンバーの一人を殺害する事態に発展した(以上、*ibid.*, pp. 380-381)。

⁶³ 以上、*ibid.*, p. 380。

⁶⁴ 以上、*ibid.*, pp. 381-382。

⁶⁵ *Ibid.*, p. 383。

⁶⁶ 与党連合代表は、ダヴィドヴィッチ、マリニコヴィッチ、クマンディ(以上民主党)、コロシェッツ(スロヴェニア人民党)、スパホ(ユーゴスラヴィア・ムスリム組織)であり、クロアチア共和農民党からは誰も呼ばれなかった。急進党代表は、ヨヴァノヴィッチ、トリフコヴィッチ、ジュリチッチ、ウズノヴィッチ、スルシュキッチであった。急進党党首のパシッチは病気を理由に出席しなかった。また野党陣営では独立民主党の

プリビーチェヴィッチは呼ばれなかった。

⁶⁷ 以上、*ibid.*, p. 385。

⁶⁸ Gligorijević, *O pitanju ulaska predstavnika HRSS u Davidovićeovu vladu i o križi i padu te vlade*, pp. 387-388.

⁶⁹ 以上、*ibid.*, p. 389。この書簡は実は国民議会議長のヨヴァノヴィッチに届けられるべきものであったが、宛名に「議長」としか書いてなかったため、これを運んだ近衛兵が間違えて内閣の議長であるダヴィドヴィッチ首相に届けたものであるという。

⁷⁰ 以上、*ibid.*, p. 389。投票の結果は次の通り。議長選挙ではヨヴァノヴィッチは259票のうち233票を獲得した。副議長選挙では262票のうちマチェックは146票、ホーニェツは147票を獲得して当選した。急進党候補のパキッチは93票、ドラゴヴィッチは32票で落選した。このほか、与党連合は議会の書記局を独占した。

⁷¹ *Ibid.*, pp. 389-390.

⁷² *Ibid.*, p. 391、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 177.

⁷³ 以上、Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p. 431.

⁷⁴ 以上、Gligorijević, *O pitanju ulaska predstavnika HRSS u Davidovićeovu vladu i o križi i padu te vlade Gligorijević*, pp. 391-392.

⁷⁵ 以上、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p. 177。このとき国王は、ダヴィドヴィッチがラディッチとの関係を絶つ声明を出せば、彼を首相に指名し総選挙の実施を任せると約束していた。ダヴィドヴィッチは声明を作成し、これを外相のヴォヤ・マリコヴィッチに託して宮廷に派遣した。ところがダヴィドヴィッチの用意した声明は国王の期待を裏切る内容であった。ダヴィドヴィッチが依然としてラディッチとの協定をめざしていることを知った国王は、ダヴィドヴィッチを首相にして選挙を実施すれば、ラディッチが実質的に選挙を管理することになってしまうと述べて、ダヴィドヴィッチを最終的に見限った。

⁷⁶ Gligorijević, *O pitanju ulaska predstavnika HRSS u Davidovićeovu vladu i o križi i padu te vlade*, p. 392.

⁷⁷ 以上、*ibid.*, p. 393。

⁷⁸ 以上、*ibid.*, p. 394。

⁷⁹ 以上、*ibid.*, pp. 395-396。

⁸⁰ 以上、*ibid.*, pp. 396-397。

⁸¹ 以上、*ibid.*, p. 397。

⁸² *Ibid.*, p. 399.

⁸³ *Ibid.*, p. 399.

⁸⁴ *Ibid.*, p. 399.

⁸⁵ *Ibid.*, p. 400.

⁸⁶ 以上、*ibid.*, p.400。

⁸⁷ *Ibid.*, p. 401.

⁸⁸ Matković, *Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant*, p. 153.

⁸⁹ プリビーチェヴィッチはこう指摘した。「政府が民族間の協定を準備しようとするならば、その政府にはクロアチア人とスロヴェニア人の多数派代表だけでなく、セルビア人の多数派を代表する者が含まれていなければならない。さらにこのような協定はクロアチアのセルビア人が承認できるものでなければならない」(*ibid.*, p. 146)。国王もまた、もしこの民族間協定の問題が提起されたときには、セルビア人の多数派を代表する急進党をさしおいて、このような協定を結ぶことができないと政府に指摘したいと考えていた。国王はこの議論を倒閣のための切り札としてとっておくつもりであった。以上、Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.

414.